

下之郷遺跡確認調査報告書 V

— 第46・47・48・49・50・51次調査報告書 —

平成21年3月

滋賀県守山市教育委員会

序 文

守山市内をゆったり流れ下る野洲川は、「近江太郎」とも呼ばれる県内最大の河川です。野洲川の下流域には沖積平野が広がり、そこに生活する人々は太古の昔より、この川の恩恵や脅威を様々なかたちで受けてきました。

大昔、農業が始まった頃、水は農作物の栽培にとっては無くてはならないものであったでしょう。市内各地の遺跡の調査成果を見ていきますと、古い川筋に遺跡が分布している様子がうかがえることは、昔人の生活にとって水の重要性が指摘できるものと考えます。しかし、ひとたび大雨が降ると野洲川は暴れ川と化し、洪水や氾濫をまき起こし、人々にとっては畏怖の対象となりました。近年では、野洲川の治水事業も進み、暴れ川の異名は消え行くこととなっていますが、市内各所には治水にかかわる歴史遺産が確認できます。

今回、報告しました下之郷遺跡は、今から25年ほど前に発見された巨大な環濠集落で、これまでに進めてきた66次の調査で2100年以上前の村の様子が少しずつ明らかになってきています。村の周囲には何重もの大きな溝が掘られているようですが、この溝の一つの意義は、やはり水からムラを守るという意義でもあったということです。

先人が残してくれた文化財は、現代に生きる私達だけでなく、子々孫々にまで伝え残さねばならない貴重な財産であります。この大切な文化遺産を保護し、永く後世に伝えていくために、私ども一層の努力を惜しまない所存ではありますが、同時に広く市民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。今回の調査成果が、まちづくりにとって、また教育活動にとって、今後少しでも寄与するところがあれば幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思えます。御批判、御教示を賜れば幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成二十一年三月

守山市教育委員会

教育長 山川 芳志郎

例 言

1. 本報告書は、平成13・14年度の国宝重要文化財等保存整備費補助金で実施した重要遺跡範囲確認調査について、平成20年度に同事業補助金で調査報告書を作成したものである。
2. 現地調査および整理調査は、守山市教育委員会で実施した。
3. 調査体制は以下のとおりで実施した。

(平成13年度)

教 育 長 川 端 弘
教 育 部 長 山 中 憲 造
生涯学習課長 金 森 悦 雄
同 上 参事 山 崎 秀 二
同 上 主任 川 畑 和 弘

(平成14年度)

教 育 長 川 端 弘
教 育 部 長 山 中 憲 造
教 育 次 長 西 田 実
文化財保護課長 山 崎 秀 二
同 上 主任 川 畑 和 弘

(平成20年度)

教 育 長 山 川 芳 志 郎
教 育 部 長 三 品 長 治
教 育 次 長 田 中 良 信
文化財保護課長 岩 崎 茂
同 上 主 査 川 畑 和 弘

4. 現地調査および本書の編集は川畑が担当した。
5. 本調査にかかる図面・写真・出土遺物は、守山市立埋蔵文化財センターに保管している。
6. 出土遺物の写真撮影は、寿福 滋（寿福写房）に依頼した。
7. 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。
8. 測量基準点は、平成10年5月26日に下之郷町に設置された3級基準点をもとにした。
(『下之郷遺跡第25次発掘調査 基準点測量成果簿』)
9. 調査に参加頂いた方は、以下のとおりである。(順不同)
(平成13年度現地調査) 金子良子、高橋孝信、竹川いずみ、谷口 孝、寺田作二、
寺田 孝、西田以津子、橋本みさ子、畑中良介、羽橋貴子、
林 義郎、速見きよみ、兵恵志保、堀出修平、松山百穂子
(平成14年度現地調査) 奥野末男、寺岡喜春、林 義郎、堀出修平、森 喜美枝、
畑中良介、水口 肇
(整理調査) 東洋建設株式会社業務委託
10. 本調査については、文化庁記念物課の坂井秀弥調査官、棚宜田佳男調査官、滋賀県教育委員会の大沼芳幸課長補佐の指導を得て実施した。
11. 現地調査にあたっては、丸山竜平（名古屋女子大学）、布谷知夫・宮本真二（滋賀県立琵琶湖博物館）のご協力を得た。
12. 現地および整理調査にあたって上記以外にも地権者をはじめ遺跡周辺の方々に、多数のご協力を得ることができた。感謝いたします。

目 次

I 位置と環境

1. 下之郷遺跡の位置と概要	1
2. 調査履歴と経過	2

II 調査成果

1. 第46次調査の成果	7
2. 第47次調査の成果	12
3. 第48次調査の成果	15
4. 第49次調査の成果	18
5. 第50次調査の成果	21
6. 第51次調査の成果	22

挿 図 目 次

図 1 守山市と下之郷遺跡位置図	図13 SD4802遺構断面図
図 2 下之郷遺跡全体図	図14 第48次調査関連遺構断面図
図 3 下之郷遺跡と周辺遺跡	図15 第48次調査出土遺物実測図
図 4 第46次調査区配置図	図16 第49次調査全体図
図 5 第46次調査大溝等断面図	図17 第49次調査関連遺構断面図
図 6 SB4601平面図	図18 第49次調査出土遺物実測図
図 7 第46次調査全体図	図19 第50次調査位置図
図 8 第46・47・48・49次調査位置図	図20 第50次調査全体図
図 9 第47・48次調査全体図	図21 第51次調査位置図
図10 SD4701遺構断面図	図22 第51次調査全体図
図11 第47次調査関連遺構断面図	図23 第51次調査出土遺物実測図
図12 第47次調査出土遺物実測図	

表 1 下之郷遺跡調査年譜	表 6 出土土器観察表（第49次調査）
表 2 出土土器観察表（第47次調査）	表 7 出土石製品観察表（第49次調査）
表 3 出土石製品観察表（第47次調査）	表 8 出土土器観察表（第51次調査）
表 4 出土土器観察表（第48次調査）	表 9 出土石製品観察表（第51次調査）
表 5 出土石製品観察表（第48次調査）	

圖 版 目 次

圖版一	上：第46次調查 調查地全景 下：第46次調查 調查地全景	圖版十	上：第49次調查 調查地全景 下：第49次調查 調查地全景
圖版二	上：第46次調查平面檢出狀況 下：第46次調查平面檢出狀況	圖版十一	上：SD4901 斷割狀況 下：SD4902 斷割狀況
圖版三	上：環濠檢出狀態 下：SDR4601	圖版十二	上：第50次調查遺構檢出狀況 下：第50次調查平面檢出狀況
圖版四	上：SDR4602 下：SDR4603	圖版十三	上：第51次調查 調查風景 下：第51次調查 調查風景
圖版五	上：第47次調查平面檢出狀況 下：第47次調查平面檢出狀況	圖版十四	上：第51次調查遺構檢出狀況 下：第51次調查遺構檢出狀況
圖版六	上：第47次調查風景 下：SD4701	圖版十五	上：第47次調查出土遺物 下：第48次調查出土遺物
圖版七	上：SD4701 調查風景 下：SD4701 斷割狀況	圖版十六	上：第49次調查出土土器 下：第49次調查出土遺物
圖版八	上：第48次調查 調查地全景 下：第48次調查 調查地全景	圖版十七	上：第51次調查出土土器 下：第51次調查出土土器
圖版九	上：SD4803 調查風景 下：SD4803 調查狀況	圖版十八	上：第51次調查出土土器 下：第51次調查出土石製品

I 位置と環境

1. 下之郷遺跡の位置と概要

守山市は滋賀県の東南部に位置し、琵琶湖の南東岸に面した平野部を占める。市域は一級河川野洲川が形成した沖積地で、山丘が無く、琵琶湖が海拔85m前後、市域の東端で約106mの標高であることから、ほとんど平坦地であると言える。市域は東西約6.3km、南北約10.9km、面積はおよそ44km²を測る。東から西に傾斜する扇状地性の地形をなし、人口は東の市街地に集中する傾向がある。近畿の経済圏にあり、京阪神からの通勤時間が約1時間という距離から昭和60年代頃からベッドタウン化が進み、住宅を中心とした開発が著しく、平成16年には人口が7万人を越えることとなった。守山市内には縄文時代から近世までの遺跡が広く分布し、現在148か所が確認されている。縄文時代早期には琵琶湖湖底遺跡である赤野井湖底遺跡が確認される他、中期から後期の集落跡（経田遺跡、下長遺跡など）が13か所、晩期の遺跡（服部遺跡、岡遺跡など）が9か所で確認されてきている。縄文人の足跡を認める琵琶湖周辺の平野部の中では最も遺跡数の多いところと言える。一方、弥生時代には、弥生前期から後期までの遺跡が25か所で確認されている。弥生前期の遺跡では、突帯文土器が弥生土器と共伴する遺跡として、服部遺跡、小津浜遺跡などが平野の中でも比較的低位な場所（三角州帯）に誕生する。弥生前期中段階の土器を出土する遺跡には服部遺跡、新段階には赤野井遺跡、赤野井浜遺跡などが湖辺部に、そしてやや内陸の自然堤防帯には中島遺跡が展開している。それから中期になると寺中遺跡、下之郷遺跡、播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡などが湖岸から離れて内陸部扇状地末端部に偏在して展開をはじめめる。これら中期の集落は畿内第Ⅱ・Ⅲ様式期に最盛期をもつ寺中遺跡をのぞき、全て環濠を備えているのが特徴といえる。中期の集落のもう一つの特徴は、同じ場所に長期間継続して集落を営むことはせずに、短期間に移動するという現象がうかがえる。それは（Ⅱ・Ⅲ様式）寺中遺跡 → （Ⅳ様式前・中葉）下之郷遺跡 → （Ⅳ様式中・後葉）播磨田東遺跡 / （Ⅳ様式後葉）二ノ畦・横枕遺跡 / （Ⅳ様式後葉）山田町遺跡 という集落の動きが確認できる。合わせて興味深いのは、下之郷遺跡では竪穴住居が一棟も確認されておらず、高床建物や壁立式建物で構成されていることである。その後続集落である播磨田東遺跡や二ノ畦・横枕遺跡では、ほとんどが竪穴住居で構成されている点である。一般に民族事例をひも解いてみても同じ部族の集団が先祖から引き継いだ居住形態を放棄することは珍しく、その断絶の背景については何らかの歴史的解釈を用意していかなければならない。集落と墓域の関係では、下之郷遺跡の場合、一所に造墓するのではなく、確認されているだけでも周辺7か所（酒寺遺跡・八ノ坪遺跡・吉身西遺跡2か所・金森東遺跡・石田遺跡・今市遺跡など）に分散して認められる。そのあり方は一辺約6～10m程度の方形周溝墓が2列配置で列状に連結して営まれており、全容が把握されている墓群はないが少なくとも十数基、多ければ1墓群50基を越える可能性が高い（図3）。そして弥生時代後期になると中期の集落から離れた場所に小集落として、酒寺遺跡、吉身西遺跡、金森東遺跡などが形成される他、大型建物を多数配置する拠点集落、伊勢遺跡が扇状地上に成立する。以上述べてきたように弥生遺跡の立地は、前期の湖岸周辺から後期の内陸部へ進出するという傾向を認めることができる他、前期の比較的早い時期から水田稲作を導入し、河川を利用した水田開発が行われていったことが知られる。しかし、野洲川下流域平野全域に定住集落が展開するようになるのは古墳時代に入ってからのもので、特に扇状地の水田開発となると古墳時代中期以降に降る可能性が高いと考えられる。

2. 調査履歴と経過

下之郷遺跡は野洲川下流域平野の中央部にあり、地形分類上の扇状地末端部分に位置している。これまでに60次以上の調査が進められ集落の様子が徐々に明らかになってきている。これまでの調査の起点にあたる第1次調査は、1980年の公共下水道工事に伴う立会調査で、溝状遺構と柱穴から弥生時代中期後葉の土器と磨製石鏃が検出されたことにはじまる。その後は、各種開発に伴う発掘調査が行なわれることとなる。1983年には都市計画道路建設にかかる発掘調査で、遺跡の南西側で幅約5～7m、深さ約1.5mの大溝が10m間隔で3条並行した状態が検出され、その大溝3条を挟んで北東側においては大小の土坑や柱穴が密集した状態で検出された。また第4次調査では、前年に検出された大溝の延長に想定される場所で新たに大溝が確認され、環濠集落として確実視されることになった。1987年の工場増築に伴う発掘調査では3条の環濠とさらに外側に3条の大溝が検出され、その環濠の一部に柵（杭列）のあることがわかった。さらに1989年の第14次調査でも3条の環濠が検出され、大量の土器や石器とともに木製の戈の柄が発見された。

転機となったのは、1994年に行なわれた現下之郷町里中道における下水道工事の立会調査である。この調査は、地下約2mに下水管を埋設する際に遺構を確認していくものであったが、これまで把握されていなかった環濠集落の北側環濠の位置を確認することができた。その結果3条環濠がめぐらされた範囲は南北径で260mとおさえられることとなった。1996年に行なった23次調査では、3条の環濠が検出され、その最も内側の環濠から埋立てて造られた集落の出入口が発見された。出入口は、柵や門で堅固に護られていて周辺から銅剣や磨製石剣、弓、石鏃などが多数出土し、弥生時代の戦いの痕跡を如実に語る場所として評価された。ここまでの調査で環濠集落の範囲がおおよそ推定されるようになったが、北東側の環濠周回位置については判然としていなかった。それは、1993年に実施した隣接する酒寺遺跡の発掘調査で下之郷遺跡に近い位置で、幅4m前後の溝が複数並行する状態で検出されていたが、下之郷遺跡で検出されていた本来的な3条の環濠のあり方（幅3～4m、深さ1.5m前後）ではなかったため、やはり下之郷遺跡の環濠であることの判断は保留せざるを得なかったからである。その後、1998年の25次調査で本来的な3条の環濠の外側にさらに3条の大溝が見つかったことで、遺跡の東側には3条の外側にさらに複数の環濠が掘削されていることが確実となった。また酒寺遺跡の調査で検出されていた大溝が25次調査の溝に繋がることが判明し、結果的に遺跡の東側には8～9条の環濠が掘られていることがわかった。この成果から9次調査の外側の3条の溝も環濠と理解することが可能となった。

環濠内部の調査は、これまで小面積を点的に行なってきたが、27次調査では中央部を面的に広げることとなった。検出された遺構には井戸や土坑、壁立式建物、区画溝が密集する状態で検出されたが、なかでも集落中央部で見つかった南北に延びる区画溝は集落の中核施設を取り囲む方形区画の一種と考えられ、その後の確認調査の重要課題となっている。重要遺跡範囲確認調査は、この25、27次の調査と史跡化への取組みを契機にして周辺の遺構分布と環濠集落域の把握を目的に平成10年度から実施していくこととなった。29次、31次調査と平成11年度に実施した34次、35次、37次、39次の確認調査は下之郷遺跡の東側環濠の位置を把握することに目的がおかれ、3条環濠の周回する推定ラインがおさえられた。国の史跡指定は、これら確認調査成果をもとに下之郷町土地権利者への説明会を繰り返し、平成13年度より指定同意取得に入り、同年8月に指定申請、翌年3月に国指定遺跡として官報告示がおこなわれた。

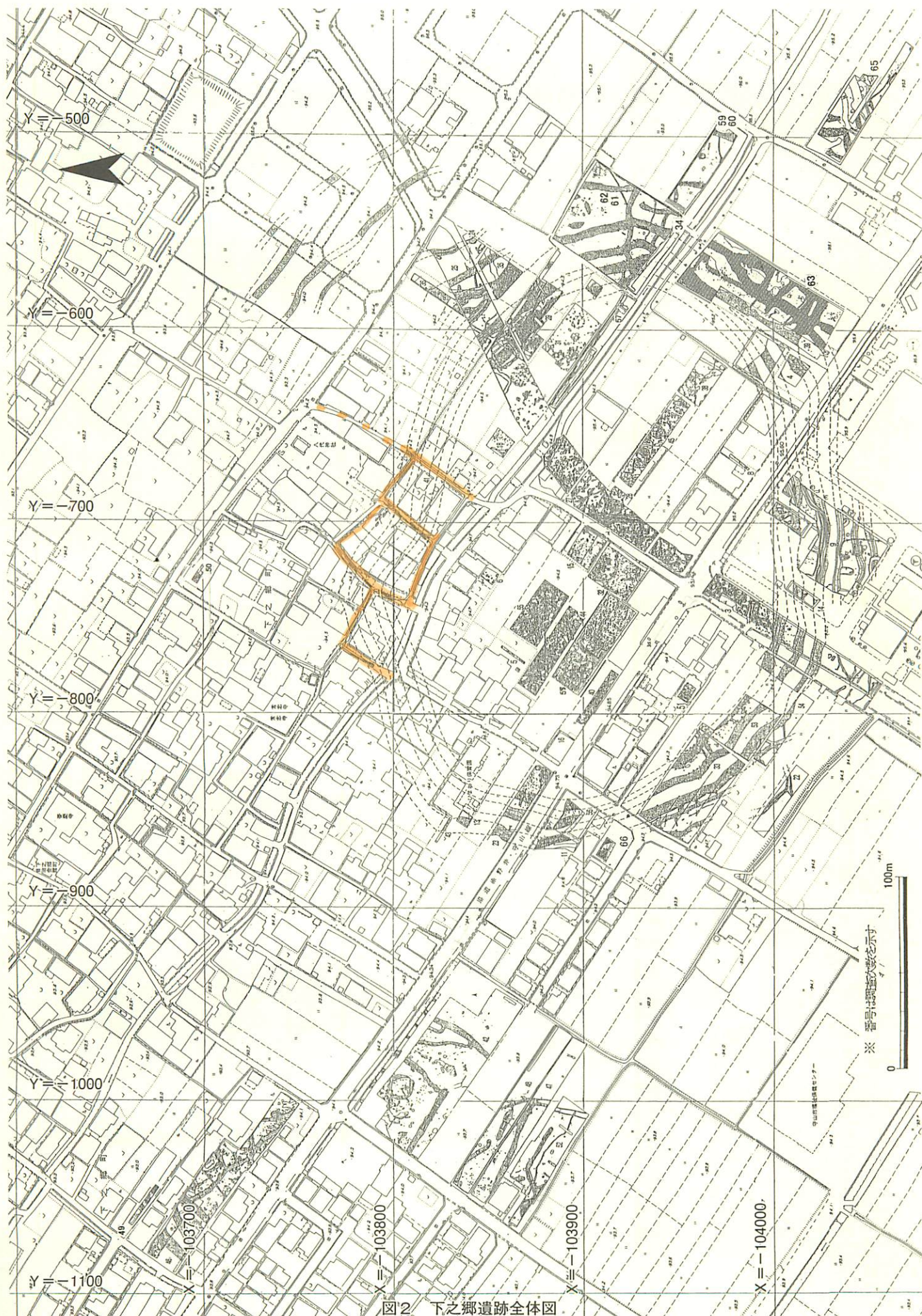


図2 下之郷遺跡全体図

表1 下之郷遺跡調査年譜

調査次数	調査年		種類	調査原因	調査地番	調査(開発)面積	概略および備考
1	1980	S55	立会	下水道	北黒田	—	3箇所中2箇所が下之郷遺跡範囲内
2	1982	S57	立会	下水道	曾々井	—	調査時は吉身西遺跡
3	1983	S58	本掘	都市計画道路	南黒田	約2160㎡	3条の環濠、調査時は吉身西遺跡
4	1984	S59	本掘・確認	個人住宅	平川端707-1	(500㎡)	3条の環濠
5	1984	S59	本掘	個人住宅	井上631-4	(455㎡)	
酒寺遺跡で調査	1985	S60	本掘	個人住宅	シノ194-10	約270(330)㎡	溝・土坑・流路、下之郷遺跡範囲外
6	1986	S61	本掘	個人住宅	井上	(250㎡)	土坑・ピット
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田646-1	(370㎡)	下之郷遺跡範囲外
7	1986	S61	本掘	個人住宅	下鎌田646-3	(400㎡)	下之郷遺跡範囲外
8	1985	S60	本掘	個人の車庫	北黒田	約19(80㎡)㎡	柱穴、溝2条
9	1987	S62～63	本掘	工場増設	上黒田708	約1,600㎡	3条の環濠、溝、土坑、鳥形木製品
10	1987	S62	確認調査	個人住宅	シノ198-4	559㎡	
11	1987	S62	試掘・発掘	個人住宅拡張	金影610-5	160(381)㎡	環濠
12	1987	S62	試掘・発掘	店舗	皆広	(230㎡)	
13	1988	S63	本掘	個人用物置	橋本615	(150㎡)	溝
酒寺遺跡で調査	1988	S63	本掘	個人住宅	シノ192-4	(797㎡)	下之郷遺跡範囲外
14	1989	H元～2	本掘	事務所・控室	上黒田	約400㎡	3条の環濠、溝、土坑、戈の柄
15	1989	H元	本掘	農用倉庫建築	井上631-5	298㎡	土坑、溝、掘立柱建物
16	1991	H 3	立会・本掘	店舗用駐車場	井上635-6	(165㎡)	溝、土坑、柱穴
17	1992	H4	本掘	共同住宅	金影611- 1 他		溝
18	1992	H4	本掘	事務所建築	見田210-2	約100㎡	溝、土坑、柱穴
19	1993	H5	立会	公共下水道	橋本	1,450㎡	環濠、土坑、柱穴
20	1994	H6	本掘	倉庫建築	北黒田673-6	約30(363)㎡	土坑、柱穴
21	1994	H6	立会	公共下水道	幸徳庵325他	(2,040㎡)	北側の環濠3条
酒寺遺跡で調査	1995	H7	本掘	個人住宅	シノ	約900㎡	下之郷遺跡範囲外
吉身西71次	1996	H8	本掘	共同住宅	下鎌田647他	約230㎡	下之郷遺跡範囲外
22	1996	H8	本掘	共同住宅	皆広	約300㎡	調査時は吉身西遺跡72次
23	1996	H 8	本掘	宅地造成	橋本	約1,200㎡	3条の環濠と建物群、銅剣
24	1997	H9	本掘	農用倉庫	見田	110㎡	溝、土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	道路側溝	北黒田	14㎡	土坑、柱穴
25	1997	H9	本掘	都市計画道路	見田	(約2,300㎡)	6条の環濠、壁立式建物、木偶
26	1998	H10	立会	下水道工事	北黒田	—	環濠
27	1998	H10	本掘	都市計画道路	北黒田671-7	1,800㎡	区画溝
28	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	北黒田676	40㎡	「報告書Ⅰ」
29	1998	H10	平面調査	店舗	見田210-1	1,241㎡	3条の環濠と盾「報告書Ⅰ」
30	1998	H10	平面調査	個人住宅	橋本622	約457㎡	環濠「報告書Ⅰ」
31	1998	H10	平面調査	確認調査(重)	見田215-1	1,157㎡	高床建物と壁立式建物「報告書Ⅰ」
32	1998	H10	平面調査	個人住宅	北黒田634-1	590㎡	1条の環濠と壁立式建物「報告書Ⅰ」
33	1999	H11	平面調査	共同住宅	皆広640-37	850㎡	5条の環濠「報告書Ⅱ」
34	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ204-1	400㎡	4条の環濠「報告書Ⅲ」
35	1999	H11	平面調査	駐車場	見田217他	500㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
36	1999	H11	平面調査	店舗建築	見田218-1・2	250㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
37	1999	H11	平面調査	確認調査(重)	シノ202-1	500㎡	2条の環濠「報告書Ⅲ」
38	1999	H11	平面調査	個人住宅	北黒田676-1	477㎡	溝、柱穴「報告書Ⅲ」
39	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	平川端705-1	400㎡	1条の環濠「報告書Ⅲ」
40	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上635-1	250㎡	溝、柱穴「報告書Ⅲ」
41	2000	H12	平面調査	個人住宅(立)	幸徳庵240	10㎡	環濠「報告書Ⅲ」

調査次数	調査年		種類	調査原因	調査地番	調査(開発)面積	概略および備考
42	2000	H12	本掘・平面	宅地造成	上門田539-1	3,986㎡	外周環濠の一部「報告書Ⅲ」
43	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	橋本615-3, 2	60㎡	環濠「報告書Ⅲ」
44	2000	H12	平面調査	確認調査(重)	井上632-1	600㎡	区画溝、大型掘立柱建物「報告書Ⅳ」
45	2001	H13	平面調査	共同住宅	北黒田676-2, 5	580㎡	区画溝、井戸「報告書Ⅳ」
46	2001	H13	本掘・平面	宅地造成(重)	久戸504-1	約1,300(1,976)㎡	外周環濠、壁立式住居 *本書に報告
47	2001	H13	平面調査	共同住宅(重)	上門田544-1	860(約951)㎡	外周環濠の一部 *本書に報告
48	2001	H13	平面調査	共同住宅(重)	上門田543-1	650(991)㎡	外周環濠の一部 *本書に報告
49	2002	H14	平面調査	宅地造成(重)	久戸507-1, 4	約80(約982)㎡	外周環濠の一部 *本書に報告
50	2002	H14	平面調査	個人住宅(重)	幸徳庵290	約20(959.97)㎡	*本書に報告
51	2002	H14	平面調査	個人住宅(重)	皆広676-2, 5	174(580)㎡	集落内、井戸 *本書に報告
52	2003	H15	平面/本掘	共同住宅(重)	上門田546-1	1,090㎡	方形周溝墓
53	2003	H15	平面調査	確認調査(重)	皆広643-1	約1000㎡	環濠の一部
54	2003	H15	平面調査	確認調査(重)	皆広640-1	約400㎡	環濠の一部
55	2004	H16	平面調査	確認調査(重)	井上631-2	約700㎡	建物、区画溝
56	2005	H17	平面調査	個人住宅(重)	金影610-4,-5	約200㎡	環濠3条
57	2005	H17	平面調査	確認調査(重)	見田208-1	約300㎡	環濠の一部
58	2005	H17	平面調査	確認調査(重)	井上633	約1,200㎡	建物、区画溝
59	2006	H18	平面調査	個人住宅(重)	シノ	354㎡	環濠3条
60	2006	H18	平面調査	個人住宅(重)	シノ	約300㎡	環濠の一部
61	2006	H18	発掘調査	整備前調査	シノ204-1	約3,000㎡	環濠6条、掘立柱建物
62	2007	H19	発掘調査	整備前調査	シノ201-4	4,288㎡	環濠6条、杭跡他
63	2008	H20	発掘調査	整備前調査	平川端701-3他	約3,100㎡	環濠、溝
64	2008	H20	発掘調査	宅地造成	平田690-1	約500(2,097)㎡	環濠、大溝ほか(正福寺遺跡で調査)
65	2008	H20	平面調査	確認調査(重)	平田690-1の一部	約1,000㎡	環濠、大溝ほか(正福寺遺跡で調査)
66	2008	H20	平面調査	個人住宅(重)	金影607	約120㎡	環濠の一部

その後も遺跡内外で範囲確認調査を進めていくこととなっているが、大きく分けると2つの調査成果が挙げられる。一つは、集落の西側で3条環濠の外方でさらに居住区と環濠が検出されたこと。もう一つは、集落内部で区画溝と大型建物が複数棟、配置されていることが判明してきたことである。前者については、平成12年度の確認調査(42次)で、これまで弥生時代の遺構がないと考えられていた地点で環濠や住居、井戸跡などが検出された。さらに46次では、これまでの西側3重環濠の外側約250mの地点で2条の環濠と内側で井戸や壁立式建物が発見され、3条環濠の外側にも居住域が設けられていることが判明した。そして、平成13年度に実施した47・48次調査でも環濠の一部や通路などが確認されることとなった。これらの3重環濠より外側の環濠については、外周環濠=すなわち3重環濠帯を「内濠」と呼称するのに対し「外濠」という用語を使用し、同心円状に二重構造になっている可能性が指摘できる。しかし、東側に立地する3重環濠に対し、別個の居住空間を想定し分岐して囲んだ集落域とみる考え方も現状では考慮しておく必要がある。これまでの調査成果をもとに遺跡全体の規模を考えると、東端から西端までの距離は約670m、南北が約460mで面積はおよそ25haにもおよぶことが推定されるようになってきている。

そして、後者の成果については、27次調査で検出された南北溝に関連して、平成10年度に実施した32次調査で南北と東西に伸びる区画溝と壁立式平地住居が検出された。平成13年度に実施した44次調査では、床面積が55㎡を超える独立棟持柱付大型建物が発見されるとともに東西に伸びる区画溝が確認された。その時点での大型建物の集落内での位置づけは「首長が儀式やまつりをおこなう場所」「集会所」「ムラ全体の共同倉庫」などの意見が出されるとともに、その建物は中心地域に方

形区画の北西一角に位置する建物の可能性が指摘された。しかし、その後、平成17年に実施した55次調査では、44次調査で検出された建物のさらに北側で整然と方位を合わせて並んだ掘立柱建物が3棟発見され、また平成18年度に実施した44次調査の南側（58次）でも方位を揃えて並ぶ建物と、別の方位軸をもつ掘立柱建物などが5棟以上検出され、集落内部の建物構成は非常に複雑で、時間経過とともに変容していく様が窺えるようになってきている。現時点までの集落中央部の調査では、建物の分布や構成をあらかじめ平面で把握する確認調査で止めているため、詳細な年代把握や建物の構造、変遷は今後の調査で明らかにしていかなければならない。ただ、丸い環濠集落の中の一所に四角く溝で囲んだ場所を設け、その内部に集落やその地域全体を体現するような建物を設ける、いわゆる方形区画のモデル的な様相とは異なった空間が展開しているものと考えられるようになってきている。

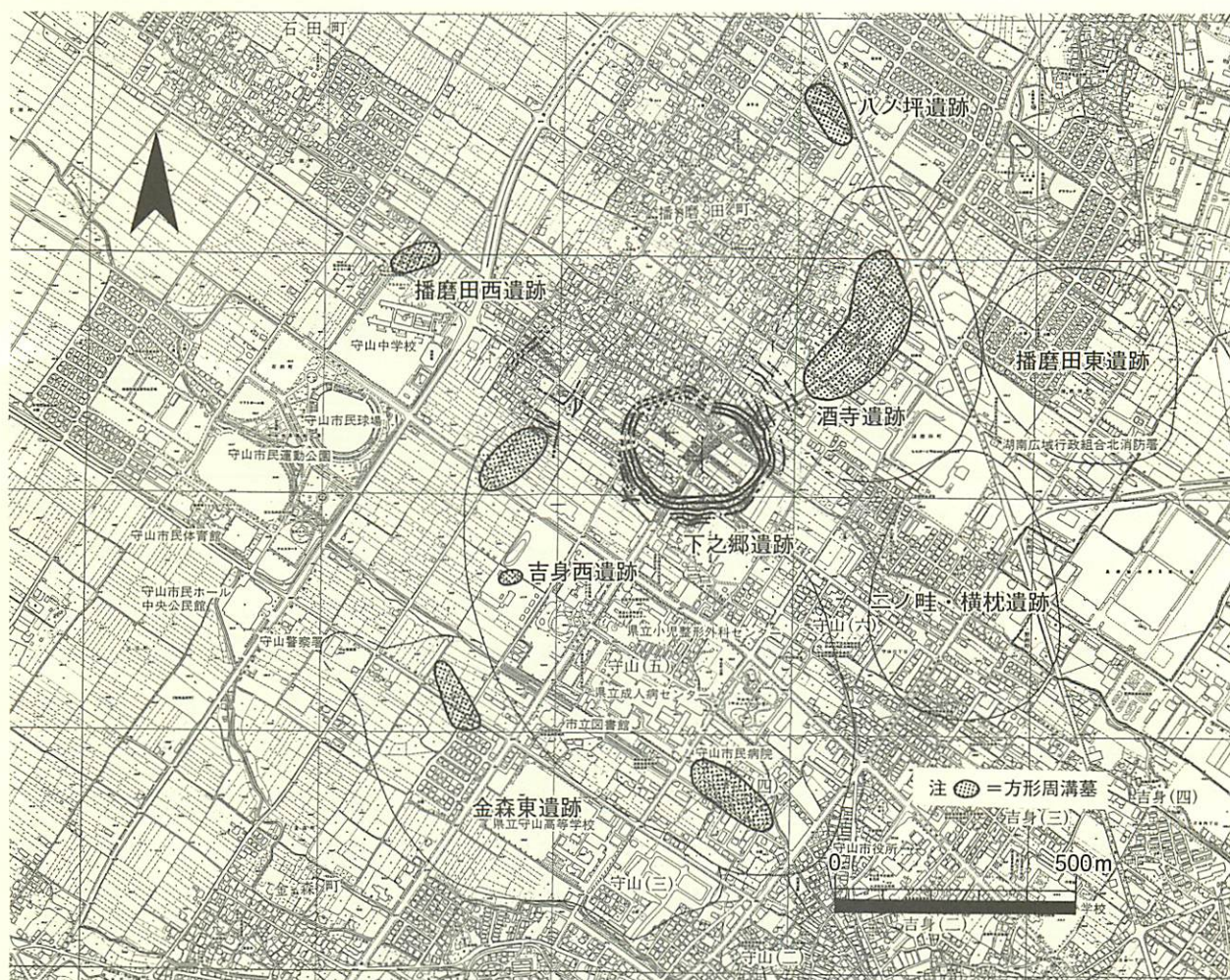


図3 下之郷遺跡と周辺遺跡（下之郷遺跡の環境と墓の位置）

（下之郷遺跡関連 参考文献）

- 1990『野洲川下流域遺跡群の構造』『守山市文化財調査報告書第38冊』守山市教育委員会
- 2001『弥生のタイムカプセル 下之郷遺跡』守山市教育委員会
- 2003『弥生のなりわいと琵琶湖－近江の稲作漁労民－』守山市教育委員会
- 2004『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅰ』守山市教育委員会
- 2005『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅱ』守山市教育委員会
- 2005『守山市誌 考古編』守山市誌編さん委員会
- 2006『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅲ』守山市教育委員会
- 2007『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅳ』守山市教育委員会

Ⅱ 調査成果

1. 第46次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字久戸504-1、505-1、505-4、505-5番地
- (2) 調査期間 平成13年5月23日～同年8月20日
- (3) 調査面積 約1,300㎡
- (4) 担当者 川畑和弘
- (5) 調査経緯と方法

守山市下之郷町字久戸504-1、505-1、505-4、505-5番地の水田地1,976.93㎡について分譲宅地造成工事の開発申請があり、事前に試掘調査を実施した結果、遺構が確認されたため、地下遺構に影響がおよぶ可能性のある道路部分について、原因者負担で発掘調査を実施し、それ以外の開発地については、国庫補助事業による範囲確認調査を実施した。今回の報告は、その範囲確認調査の成果部分を中心に記載し、関連する遺構や遺物について説明が必要な部分については原因者負担による調査部分の図面も掲載することとした。

調査区（トレンチ）の設定は、対象地の南東側からTA地区、中央部をTB地区、残りの土地の南側をTC地区、北側をTD地区とし、4つのトレンチを設けて調査をすすめた。このうちTB・TD地区については進入用道路建設部分にあたるため、本発掘調査を実施した。TA・TC地区については重要遺跡範囲確認調査扱いとし、平面的な遺構検出と測量、一部掘削（断割り）調査に留め、調査後は地下に遺構を保存する区域とした。検出した遺構にはトレンチごとに番号を付け、遺物の取上げを行った。

遺構検出作業は、重機（バックホー 0.4㎡）にて表層土（耕土）を除去した後、床土部分を除去すると、ただちに黄灰色極細砂質シルト土をベースとした遺構面が検出（地表約30cm下位）され、その後、重機と人力を併用して遺構の面的な広がりやの識別、把握を進めた。

遺構の記載は、トレンチごとに検出作業を完了した後に平板測量で1/50縮尺の平面図を作成し、検出された柱穴や溝状遺構の配置と、柱穴の規格や柱穴に充填された土砂の色調、粒度に注意しながら、あらかじめ遺構番号を与え、それぞれの関係性の把握にあたった。

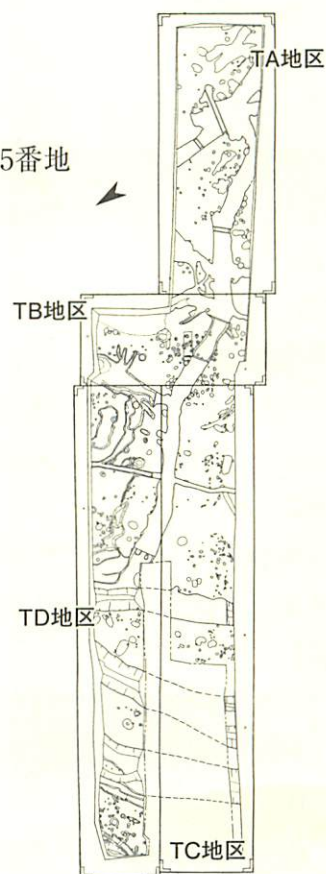


図4 第46次調査区配置図

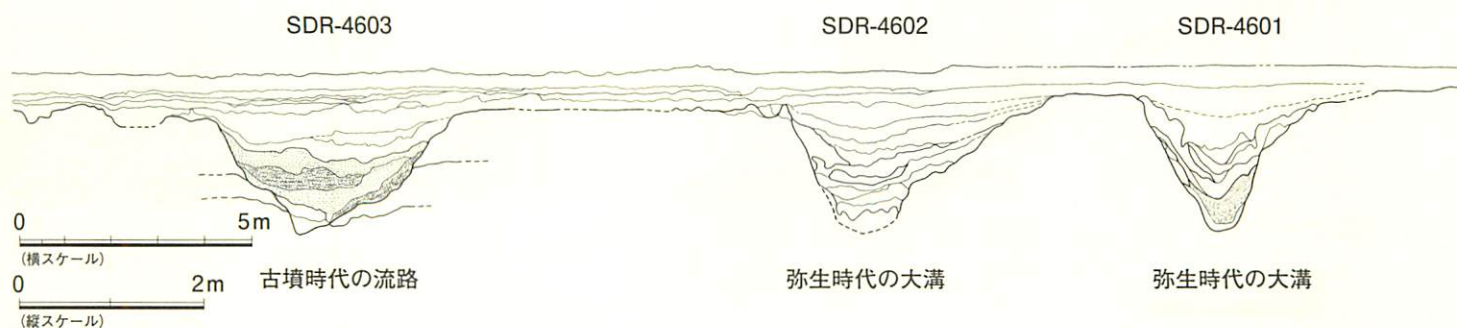


図5 第46次調査大溝等断面図

（※断面図位置は図7による）

(6) 検出遺構

TA地区

調査対象地の南東端に位置する調査区である。溝や土坑、密度は高くないがピットが検出された。溝の一部を断割って深さを確認する以外は、掘削調査を行っていない。

SD4601

SD4602から枝分かれして、さらに北方へ伸びる溝でTD地区において環濠（SDR-4601）に接合している。幅1～1.5m、深さ約30cmを測る。

SD4602

調査区南隅から北へと伸びる溝で、幅1～1.5m、深さ約30cmを測る。SD4601と一部で接合している。

TB地区

調査対象地の中央部に位置する調査区である。溝やピット、土坑状遺構が検出された。

SB4601

TB地区中央で検出された壁立式平地住居。直径30cm前後の柱穴が直径約6mの円周上に配置され、その内部には二本の支柱穴が確認できる。建物中央部を溝が切込む形で掘られており全容は不明。

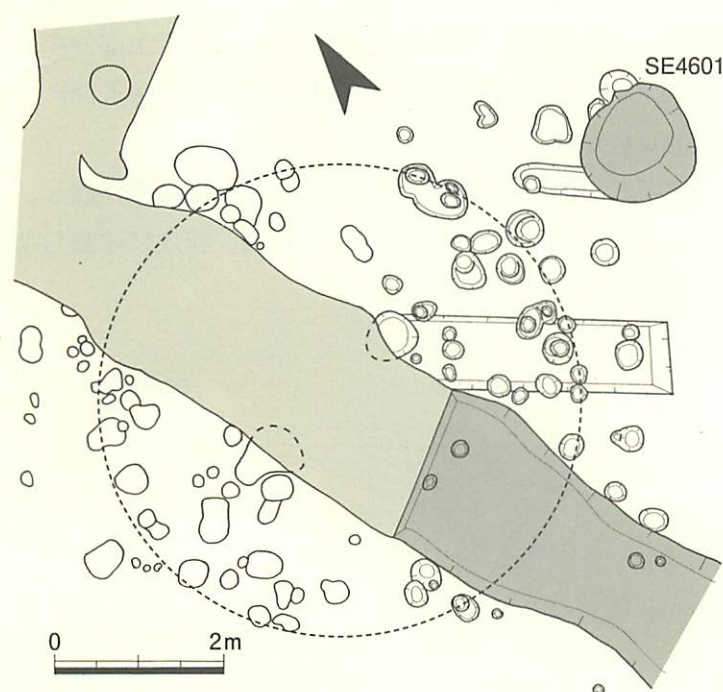


図6 SB4601平面図

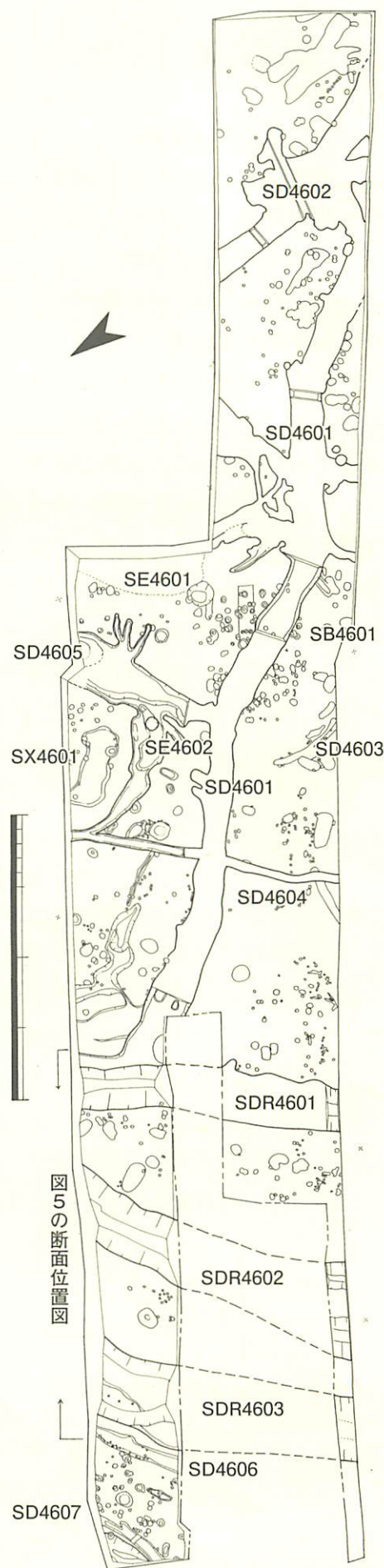


図7 第46次調査全体図

SD4603

SB4601の西側で検出された小溝で、幅約20cmを測る。SB4601の側柱の外側約4mの間隔を空けて円弧を描くように掘られている。壁立式建物（SB4601）に付随する周囲溝と推定される。

SE4601

TB区の中央部、SB4601の東側で検出された直径約170cm、深さ約150cmの円形の土坑状遺構で、井戸もしくは、水溜め施設と考えられる。弥生時代中期後葉の土器細片が出土している。

TC地区

調査対象地の北西側に位置しTD地区に隣接する調査区で、溝（環濠）、土坑、ピット等を検出した。今回の開発では、遺構の破損が無いとため、溝の一部を断割って深さを確認する以外は、掘削調査を行っていない。

SD4604

調査区南西から北東へと伸びる小溝で、幅20cm、深さ約10cm、断面U字形をしている。SD4601と切り合い関係を持つが、新古関係は明確に出来なかった。

TD地区

調査対象地の北東側に位置しTC地区に隣接する調査区で、溝（環濠）、土坑、ピット等を検出した。今回の開発で遺構の一部が損傷する可能性があるため発掘調査を実施した。

SX4601

調査区東隅で検出された不定形な土坑状遺構で、長径が約6m、短径約3mを測る。周囲には方形に小溝（SD4604）が配置されている。

SD4605

不定形土坑（SX4601）を四角く囲むように掘られた小溝で、井戸跡（SE4602）が切り合う様に検出されている。井戸に付随する溝の可能性もある。時期は出土した土器から弥生時代中期（Ⅳ期）後葉に比定される。

SD4606

SDR4603の北岸に沿うように掘られた小溝で幅約1.5m、深さ約20cmを測る。溝は、砂に覆われた状態で検出された。北岸には丸小杭が列状に打ち込まれた痕跡が確認された。時期は出土した土器からSDR4603の上層大溝と同様、古墳時代前期に比定される。

SD4607

SDR4603の北岸約7mの間隔を空けて並んで掘られた小溝で、幅約1m、深さ約15cmを測る。出土土器が乏しく時期は判然としない。

SE4602

平面形状は円形で、井戸口直径約110cm、深さ約170cmの素掘り井戸。下層から用途不明木製品や破損した鋤身とともに弥生時代中期後葉（Ⅳ様式前半代）の土器が出土している。

SDR4601

調査対象地の北側で検出された3条の大溝の一番南側の大溝。幅4m、深さ1.7m、断面形状V字形をしている。溝底には粘土の沈水堆積と植物遺体の緩やかな水平堆積が認められる。出土した土器の量は、上～中層よりコンテナ約1箱分程あるが、下層遺物は少量である。出土遺物の年代はⅣ様式中葉で、前葉に遡るものは少ない。

SDR4602

幅4m、深さ1.5m、断面形状U字形をしている。溝底には粘土の沈水堆積と植物遺体の緩やかな水平堆積が認められる。出土した土器の量は、下層より壺小片が数点採取されたのみ。出土遺物の年代はⅣ様式中葉である。

SDR4603

幅5m、深さ1.6m、断面形状は緩やかなU字形をしている。溝の埋積は大きく2時期ある。下層は植物遺体と砂が互層になって堆積した自然流路があり、それをトレースするように上層の大溝が流れている。SDR4601やSDR4602とは堆積状況が大きく異なる。出土遺物については、上層の大溝より古墳時代前期に相当する古式土師器（布留式）が大量に出土している。下層の流路からは年代を決定するにたる土器の出土は無い。

（参照：2004『下之郷遺跡42・46次概要報告書』守山市教育委員会）

(7) 小結

第46次地点で得られた調査成果を整理すると以下の点が留意される。

1. 調査区の北隅で検出された3条の大溝のうち、少なくとも2条は弥生時代中期後葉（Ⅳ期中葉）に掘られていることが確実である。
2. 検出された大溝3条を挟んで南東側には住居跡や井戸跡が検出されていて、弥生時代中期の集落（居住域）が広がっていることが確実である。また、今のところ3条を挟んで北西側では、集落関係遺構が検出されていない。
3. 検出された住居形式は、二ノ畦・横枕遺跡や播磨田東遺跡で一般的に確認される竪穴住居とは異なり、これまでの下之郷遺跡の調査で確認されている円形壁立式建物に共通するものである。
4. 今回の46次調査では、既に判明していた3条環濠（23次）の西外側約250mの地点で新たな環濠を検出した。現時点では、この地点が下之郷遺跡の最北西端に位置するものと考えられる。42次調査で検出されている大溝（条濠）も考慮に入れて、遺跡の広がりや集落構造を見直す必要が出てきている。

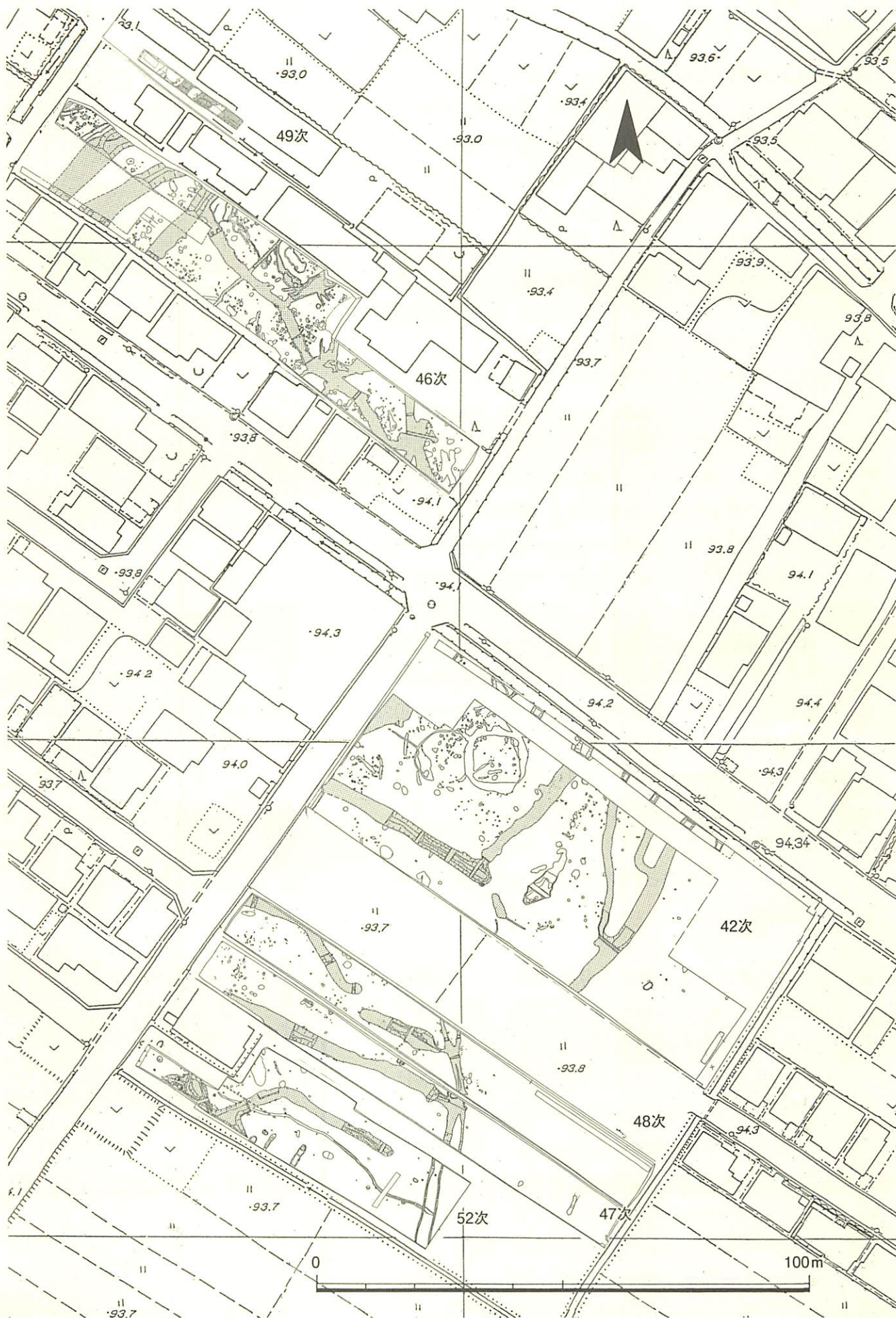


図8 第46・47・48・49次調査位置図

2. 第47次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字上門田544-1番地
- (2) 調査期間 平成13年10月12日～同年12月7日
- (3) 調査面積 860㎡
- (4) 担当者 川畑和弘
- (5) 調査経緯と方法

守山市下之郷町字上門田の水田地951.62㎡について共同住宅建築工事の開発協議があがったため、事前に確認調査を実施し、地下遺構の状態把握にあたった。

調査は短冊形の対象地の長辺中心線を軸に左右2分するように分割して調査を実施した。遺構を平面検出した結果、調査区のほぼ中央部から西側に向けて大溝や土坑、柱穴が検出され、中央部から東側にかけては、遺構が希薄であることが判明した。共同住宅建築工事については、当初、敷地中央部に建築予定であったが、確認調査の結果を踏まえて協議を行ない、遺構の希薄な東側に計画変更して建築されることとなった。また、上下水道の設置についても遺構面上位にとどまる形となったため、基本的には地下遺構の損傷は最小限に止めることができた。遺構の調査は、対象地の東辺部の擁壁工事部分について原因者負担で発掘調査を実施し、それ以外については、国庫補助事業による範囲確認調査を実施した。今回の報告は、その範囲確認調査の成果を中心に記載することとした。

(6) 検出遺構

調査対象地の中央部から西側にかけて大溝や溝、土坑、柱穴などを検出した。

SD4701

幅約4m、深さ1.5m、断面形状緩やかなV字形を呈する大溝で南東から北西に向けて伸びている。東側先端は、かけ上がって浅くなりSD4702と小溝でもって接合している。大溝SD4701の堆積状況は、大別すると1～6層は大溝が機能を失い、陸地状となった時点で雨水や氾濫により運ばれてきた土砂の可能性があるもの。7～9層については、環濠が水を湛えていた状態で土砂が堆積したものに分けられる。堆積状況をさら詳しく観ると以下のとおりである。上層1～3は、灰色系の極細砂質土が充填しており、出土土器の小碎片より古墳時代前半期に埋もれた可能性がある。4～5層については、褐色系のシルト質土によって

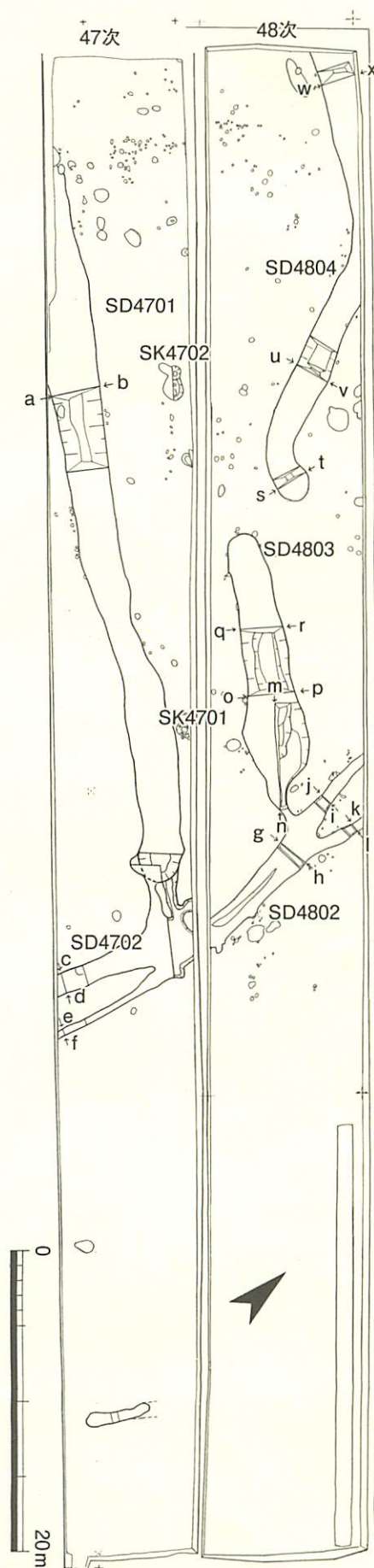


図9 第47・48次調査全体図

なる。6層は、地山ブロック（偽礫）を含むシルト質土で大溝の縁、北側の土砂が崩落もしくは人為的に埋められた可能性のある土砂。7層は水中での堆積土砂で丸太や材、有機物を含む灰色系粘質土である。8層は黒色系の有機質土で植物の葉が少量含まれている。9層は有機質がほとんど含まれてない灰色系粘質土からなる。以上の観察から大溝の堆積物には砂によって構成される堆積物は認められず、流速をもって水が流れている状況は想定できない。また、70～100cm程度の水深をもった大溝であることが堆積状態からうかがえる。出土遺物は少量であるが、弥生時代中期後葉（Ⅳ期前葉）の土器が出土している。

SD4702

調査区南から北へと伸びる溝で、南側で2筋のものが北側で1筋になっている。北隅においては幅約1m、深さ約20cmを測る。堆積土には一部で砂質土が含まれていて、水が流れていた痕跡ともいえる。出土遺物はない。

SK4701

調査区中央北隅で検出された不定形な土坑で径約60cm、深さ40cmを測る。出土遺物はない。

SK4702

調査区北側で検出された土坑で、2つの土坑もしくは柱穴が重複している可能性がある。径約90cm、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

その他

調査区北西隅、大溝（SD4701）の北岸地域には多数のピットが検出されている。平面検出で止めたため、深さなど詳細は不明だが、建築物に伴う柱穴などではなく、杭などの痕跡の可能性が高い。

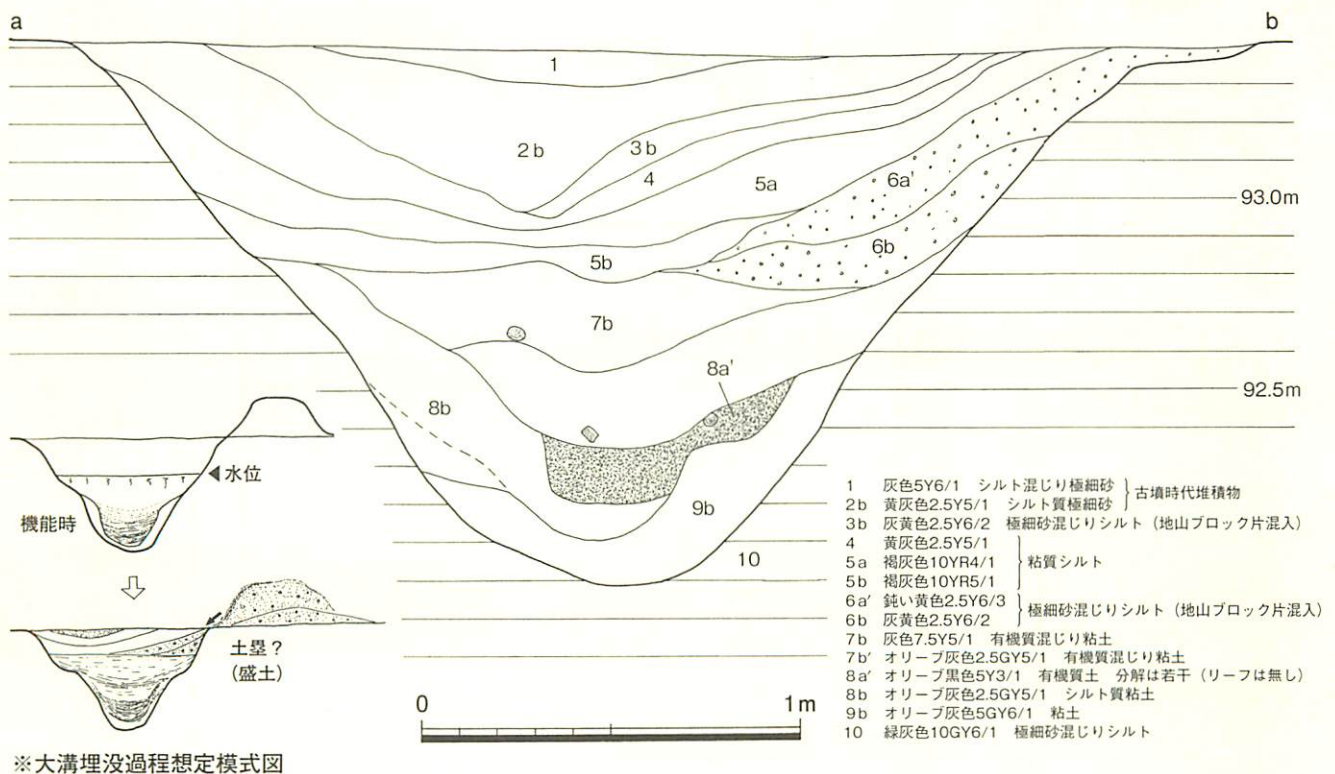


図10 SD4701遺構断面図

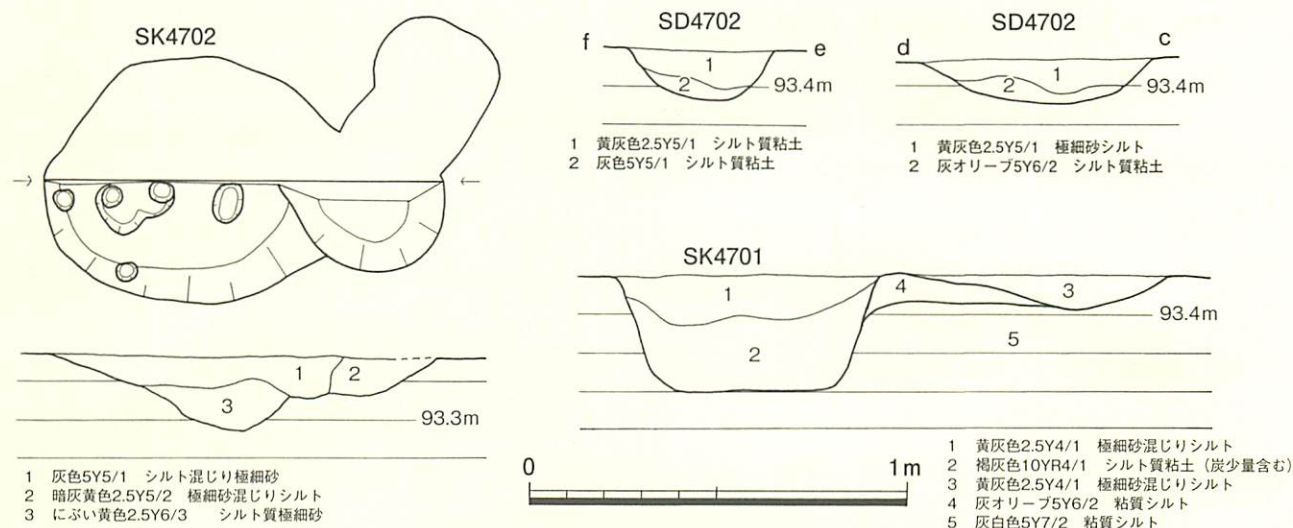


図11 第47次調査関連遺構断面図

(7) 出土遺物

今回の調査では、遺構の平面検出と一部断ち割り調査によるもので、掲載できた出土遺物は大溝 (SD4701) 出土の弥生土器 4 点と石製品 1 点にとどまる。

土器 (47001 ~ 47004)

大溝 (SD4701) 出土の弥生土器 4 点は、甕の口縁部破片である。いずれも第 1 口縁からやや外方に第 2 口縁を立ち上げる在地系受口甕で、第 2 口縁外面には全体に斜ハケを施し、ナデ消しや施文は観察できない。畿内第Ⅳ様式前葉に位置づけられるものである。

石製品 (47001s)

47001sは、扁平で小型の打製石鏃で、サヌカイト製と判断される。

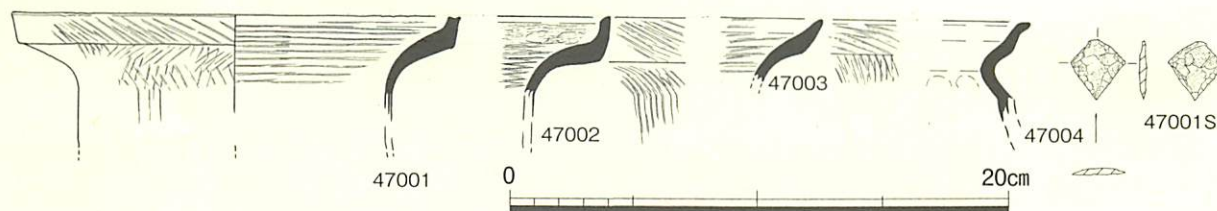


図12 第47次調査出土遺物実測図

表 2 出土土器観察表 (第47次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調/胎土/焼成	備考
47001 図12 図版十五	甕	TA (1)	SD4701 ベルト内	9層	口径: 18.0cm 残存高: 3.3cm	外反する第1口縁からやや外傾気味に第2口縁を立ち上げる。口縁端面は水平に仕上げる。	外面口頸部は縦、斜ハケ。第2口縁部は斜ハケ。端部にキザミ目を施す。内面第1口縁は横ハケ。	色調: (内) 7.5YR6/3 (外) 7.5YR5/3 胎土: 1mm大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部1/7 ~ 頸部
47002 図12 図版十五	甕	TA (1)	SD4701	下層 (有機質層)	口径: 不明 残存高: 3.3cm	外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	口縁外面は斜ハケ、内面は横ハケ。	色調: (内) 10YR8/2 (外) 7.5YR5/3 胎土: 1mm大までの石粒を多く含む 焼成: 良好	口縁部若干
47003 図12 図版十五	甕	TB (1)	SD4701	上中層	口径: 不明 残存高: 2.6cm	外反する第1口縁から第2口縁を外傾して立ち上げる。	外面第1口縁部に縦、斜ハケ。第2口縁斜ハケ。内面口縁部には横ハケ。	色調: (内) 7.5YR7/2 (外) 7.5YR4/1 胎土: 1mm大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干
47004 図12 図版十五	甕	TB (1)	SD4701	上中層	口径: 不明 残存高: 3.3cm	短く外反する第1口縁から外傾気味に第2口縁を立ち上げ端部は外側につまみ出す。	内外面ともにナデ仕上げ	色調: 10YR8/2 胎土: 1.5mm大までの石粒を含む 焼成: 良好	口縁部若干

表 3 出土石製品観察表 (第47次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
47001s 図12 図版十五	打製石鏃	TA (1)	SD4701	7層	サヌカイト	23.5	22	2.5	1.2	

3. 第48次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字上門田543-1番地
- (2) 調査期間 平成13年11月30日～同年12月28日
- (3) 調査面積 650㎡ (991㎡)
- (4) 担当者 川 畑 和 弘
- (5) 調査経緯と方法

守山市下之郷町字上門田の水田地991㎡について共同住宅建築工事の開発協議があがったため事前に試掘調査を実施した結果、遺構が確認されたため、地下遺構に影響がない工法が無いか検討した結果、建設位置を一部変更し、造成地盤の改良法を変化させることで協議がまとまり、地下遺構の保護が可能となった。したがって、調査は遺構の一部を断割り調査するにとどめ範囲確認の後、記録を取り、埋め戻し調査を終了した。

(6) 検出遺構

調査対象地の中央部から西側にかけて大溝や溝、土坑、柱穴などを検出した。

SD4802

幅約60cm、深さ約20cm、断面形状緩やかなU字形を呈する2条の並行する小溝が南から北に向け、一部接する状態で伸びている。堆積土には細砂が含まれ、流水に起因するものと判断される。また、左岸に位置するSD4803と小溝をもって接続しており、南から流れてきた水をSD4803に導き入っていた可能性がある。隣接地調査のSD4702の延長部分にあたる。

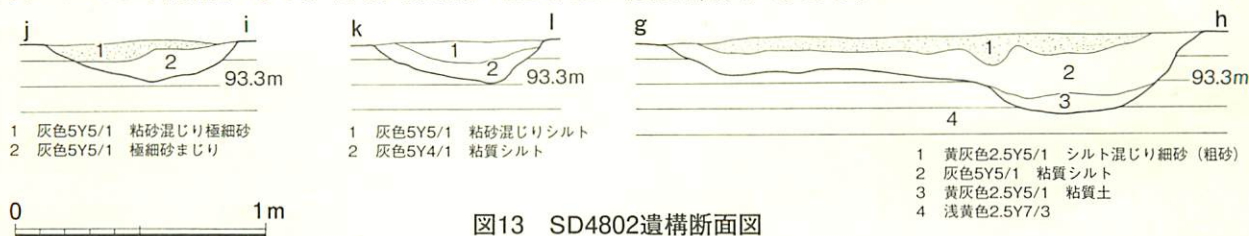


図13 SD4802遺構断面図

SD4803

幅約3.5m、深さ約150cm、断面緩やかなV字形を呈する溝状遺構である。南東端は、緩やかに駆け上がり途切れ、先端部にはSD4802と小溝でもって接続している。北西端もその北側に位置するSD4804と約3.5mの間隔を空ける位置で途切れている。土砂の堆積状況を図14から説明すると、1～3層は、灰色系の極細砂土からなる。4～7層は、褐色系の極細砂土で地山ブロック粒土が含まれている。大溝際の盛土だった可能性もある。8～9 b層については湿地状の堆積でシルトを主体とするもので、有機質の分解したものが一部含まれている。9 c層より11層（最下層）までは水中で沈殿堆積した土砂で、有機質や木材混じりの粘質土を主体としている。出土遺物には、下層より弥生時代中期後葉（Ⅳ期前葉～中葉）の土器が出土している。

SD4804

幅約2.5m、深さ約120cm、断面U字形を呈する大溝である。南東端は、短く屈曲する状態で途切れ、先端部はSD4803と約3.5mの間隔を空けている。この間隔は通路や出入口となっていた可能性がある。周辺には、柱穴や杭跡も確認されている。南北に直線的に伸びる大溝は、「く」の字状に折れ、北西へとさらに伸びている。出土遺物には、弥生時代中期後葉の壺、甕の破片と扁平片刃石斧がある。

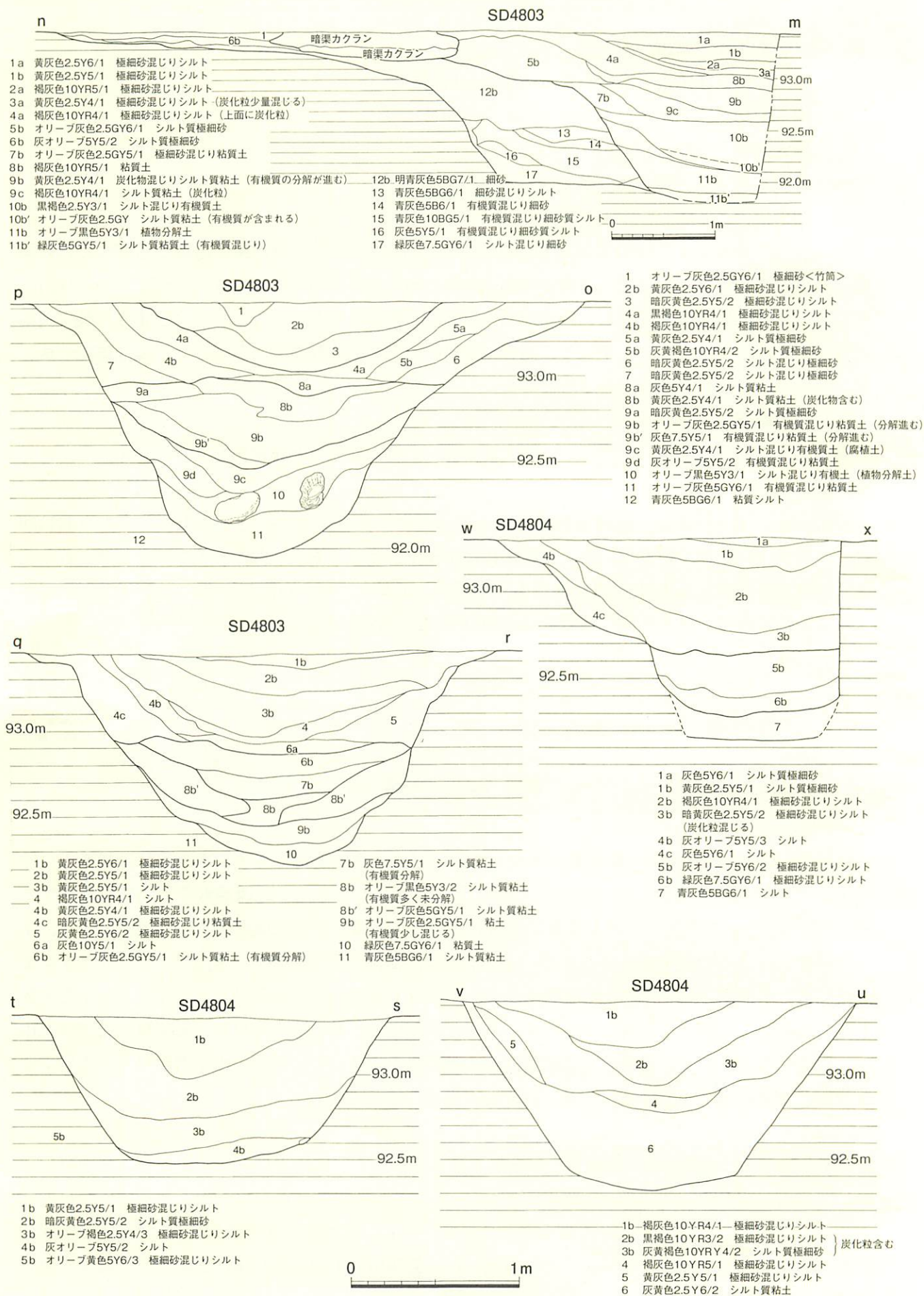


図14 第48次調査関連遺構断面図

(7) 出土遺物

今回の調査では、遺構の平面検出と一部断ち割り調査によるもので、掲載できた出土遺物は溝状遺構（SD4803）出土の弥生土器5点と大溝（SD4804）出土土器2点、石製品1点にとどまる。

土器（48001～48007）

48001・48002は、受口状口縁をもつ壺の口縁部で外反して立ち上がる第1口縁に2孔1対の穿孔があり、蓋をもつものである。48003～48005は受口状口縁甕で、48004は、第2口縁外面を斜ハケした後に、口縁先端部をつまみナデ消しを施しており、Ⅳ様式前葉よりやや後出の要素をもっている。48006は細頸壺の一種で、口縁外面と頸部に列点文を施している。48007は受口状口縁甕の口縁部で、第2口縁外面全面に斜ハケを残している。

石製品（48001s）

48001sは、小型の扁平片刃石斧の破損品である。

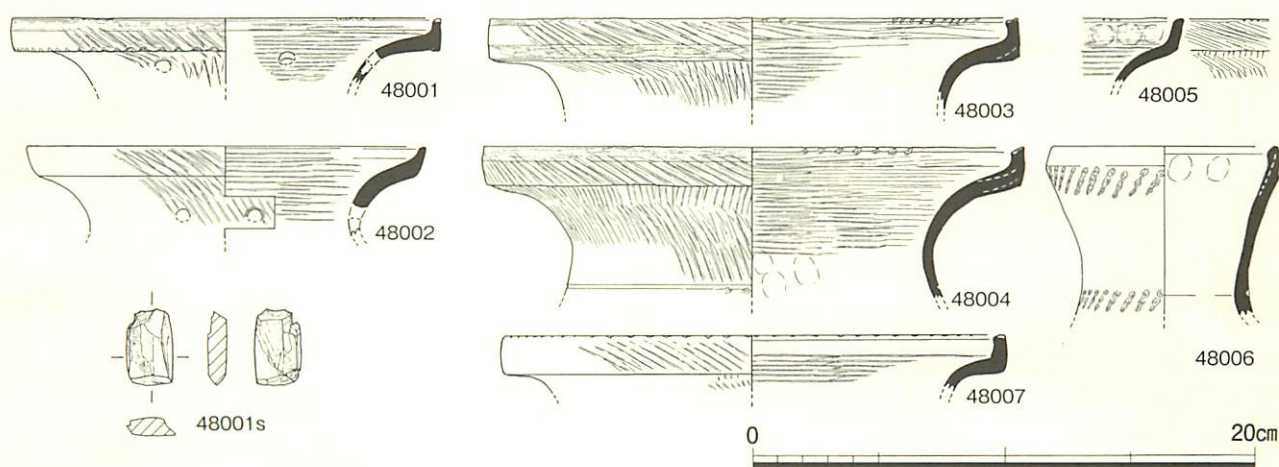


図15 第48次調査出土遺物実測図

表4 出土土器観察表（第48次調査）

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調/胎土/焼成	備考
48001 図15 図版十五	壺	TA (1)	SD4803 第2ベルト	11層	口 径：17.0cm 残存高：2.7cm	外反する第1口縁から垂直に第2口縁を立上げる。	外面第1口縁は縦、斜ハケ。第2口縁は斜ハケ後、上部を横ナデ。上、下端にキザミ。内面は横ハケ。頸部に円孔を穿つ。	色調：10YR8/1 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/4弱
48002 図15 図版十五	壺	TA (1)	SD4803	9、10層	口 径：16.0cm 残存高：3.6cm	ゆるやかに外反する第1口縁から、やや外傾する第2口縁を立上げる。	外面口縁部に斜ハケ。内面第1口縁部は横ハケ。第2口縁部は横ナデ。頸部に2個1対の円孔を穿つ。	色調：(内) 7.5YR7/3 (外) 7.5YR8/2 胎土：1.0mm大の石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部 1/4
48003 図15 図版十五	甕	TA (1)	SD4803	10層	口 径：21.0cm 残存高：3.6cm	外反する第1口縁からほぼ垂直に第2口縁を立上げる。口縁端部は内傾気味に面を作る。第2口縁外面下半にナデを加え弱い稜を作る。	外面口縁部に縦、斜ハケ。第2口縁部には斜ハケの後に下半を横ナデしてハケをスリ消す。口縁端部にハケ状工具によるキザミ。内面は横ハケ。	色調：7.5YR5/2 外面スス付着 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/6
48004 図15 図版十五	甕	TA (1)	SD4803 第2ベルト	9、11層	口 径：21.5cm 残存高：6.0cm	ゆるやかに外反する第1口縁からほぼ垂直に第2口縁を立上げる。口縁端部は内傾気味に面を作る。第2口縁外面上半に強いナデを加え弱い稜を作る。	外面口縁部は縦、斜ハケ。第2口縁部は斜ハケの後に上半を横ナデしてハケをスリ消す。口縁端部にキザミ。内面に横ハケ。	色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 7.5YR17/1 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/4～頸部
48005 図15 図版十五	甕	TA (1)	SD4803	10層	口 径：不明 残存高：2.5cm	ゆるやかに外反する第1口縁から、外傾気味に第2口縁を立上げる。	外面第1口縁に縦、斜ハケ。第2口縁は斜ハケ。口縁端部にキザミ。内面第1口縁部は横ハケ。第2口縁部はナデ。	色調：7.5YR7/3 (外) スス付着 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部若干
48006 図15 図版十五	壺	TA (1)	SD4804 第3ベルト	1～3層	口 径：9.0cm 残存高：6.7cm	頸部から緩やかに外上方に伸び内折する。	内外面とも摩滅のため調整不明。外面頸部、口縁部にキザミ。	色調：7.5YR8/1 胎土：1.0mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部 1/4～頸部
48007 図15 図版十五	甕	TA (1)	SD4804 第3ベルト	5～6層	口 径：20.0cm 残存高：2.2cm	外反する第1口縁から、垂直に第2口縁を立上げる。	外面第1口縁部に縦、斜ハケ。第2口縁部は斜ハケ。口縁端部にキザミ。内面第1口縁部は横ハケ。第2口縁部はナデ。	色調：(内) 10YR8/1 (外) 7.5YR7/3 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部 1/7

表5 出土石製品観察表（第48次調査）

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
48001s 図15 図版十五	扁平片刃石斧	TA (1)	SD4804 第3ベルト	上層		30	18.7	7.3	5.49	

4. 第49次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町字久戸507-1、507-4番地
- (2) 調査期間 平成14年1月8日～同年1月28日
- (3) 調査面積 約80㎡ (約982.47㎡)
- (4) 担当者 川畑和弘
- (5) 調査経緯と方法

守山市下之郷町字久戸507-1、507-4番地の宅地982.47㎡について分譲宅地造成工事の開発の申請があがり、協議をした結果、遺構を傷めない工法で造成をおこなうこととなり、調査種別を範囲確認調査とし、進入路部分について事前に筋状トレンチ掘りの調査を実施した。その後は擁壁工事の立会調査を実施した。

(6) 検出遺構

調査を実施したのは、対象地の西端の進入路予定部分約50㎡で、大溝や柱跡等を検出した。

SD4901

幅約2.5m、深さ約80cm、断面形状逆台形を呈する溝で南から北に向けて伸びている。溝の堆積は灰色系の極細砂質土を主体とする。出土遺物には、弥生時代中期後葉の土器が出土している(49001・49002)。

SD4902

幅約3m、深さ約60cm、断面形状緩やかなV形を呈する溝で南から北に向けて伸びている。溝の堆積は灰色系の極細砂質土が上層に、褐色系のシルト質土が中層、下層は灰色系の細砂や極細砂によって埋もれている。出土遺物には、古墳時代前半期の土器が出土している。(49003～49009)。

SD4903

幅3m以上、深さ約80cm、断面形状緩やかなU字形を呈する溝で南から北に向けて伸びている。溝の堆積は灰色系の極細砂質土を主体としている。出土遺物は上層より土師皿が2点出土している。しかし、下層溝からの出土遺物は無く、溝掘削時期を限定するには至っていない。堆積状況から勘案すると第46次調査で検出されている弥生時代中期後葉の大溝の延長部分である可能性もある。

(7) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物で図示できたものは、土器11点と石製品1点である。そのうちSD4901からの出土遺物は土器2点(49001、49002)、SD4902からは土器が7点(49003～49009)、SD4903からは土器が2点(49010、49011)と石製品1点(49001s)を数える。

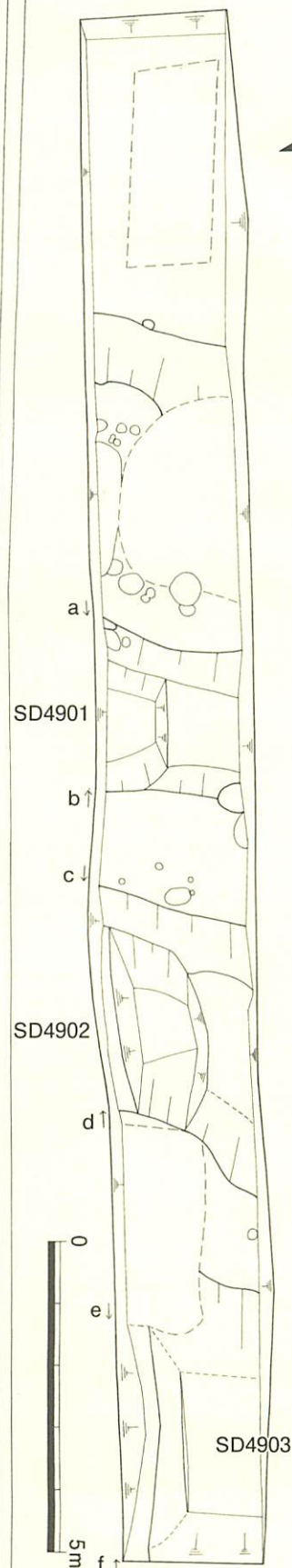
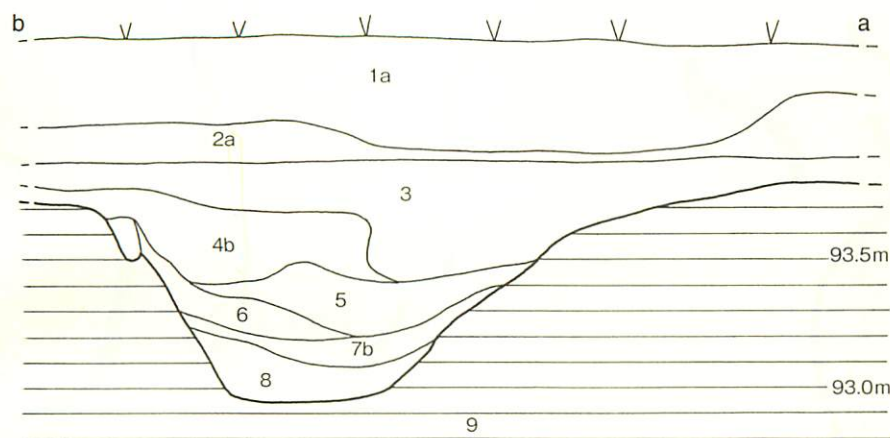


図16 第49次調査全体図

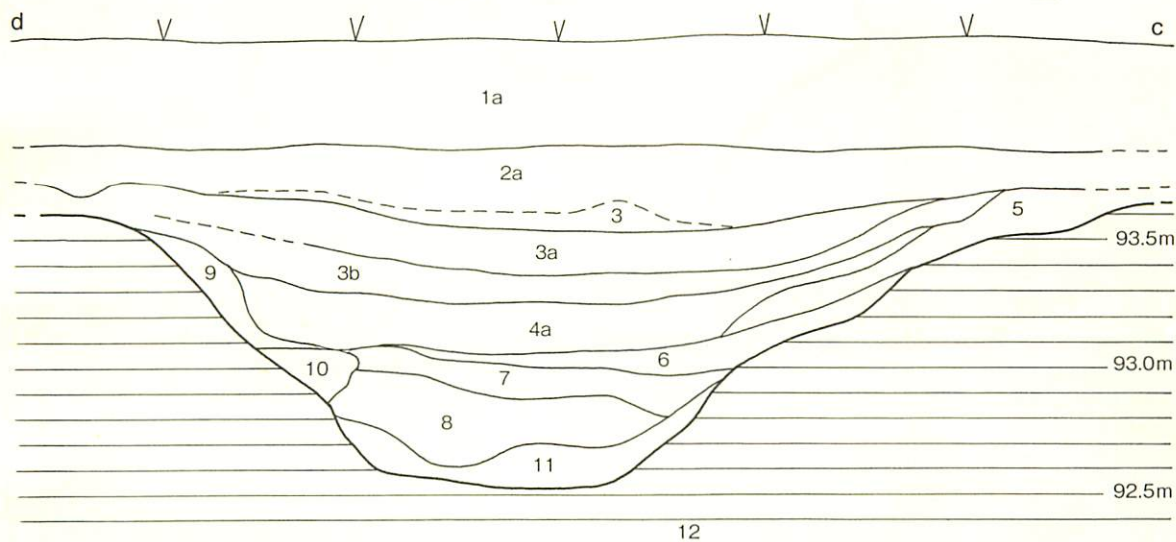
SD4901



- 1a 灰色5Y4/1 細砂混じり極細砂
(小礫混じり)
2a 灰色5Y5/1 旧耕土 細砂混じり極細砂
3 灰オリーブ5Y5/2 シルト混じり極細砂
4b 灰色5Y5/1 シルト混じり極細砂
(地山ブロック)
5 黄灰色2.5Y5/1 シルト混じり極細砂
6 灰黄色2.5Y6/2 極細砂混じりシルト
7b 灰色10Y5/1 極細砂
8 オリーブ灰色2.5GY5/1 シルト質粘土
9 灰色7.5Y6/1 粘質土

0 1m

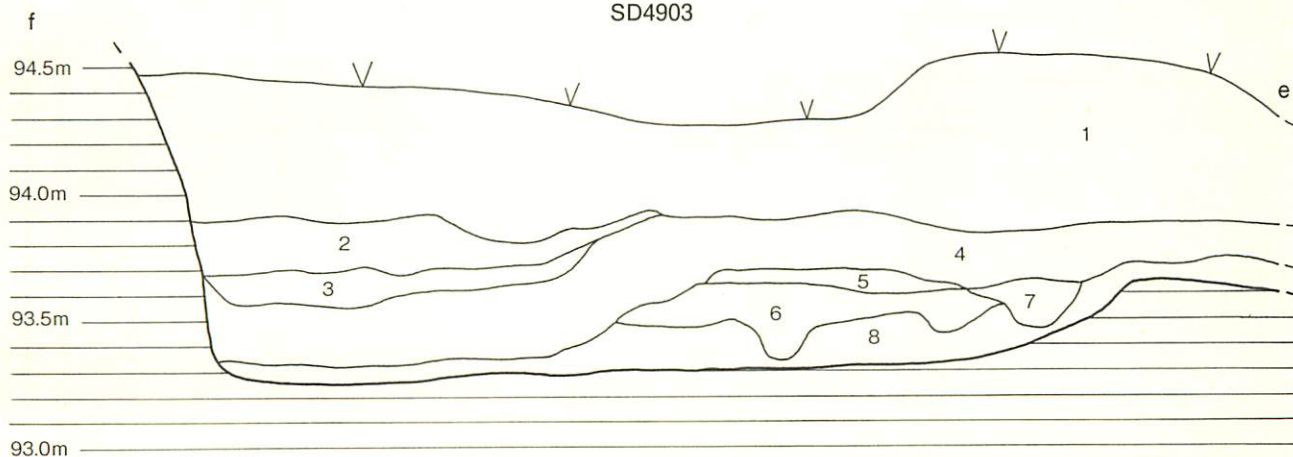
SD4902



- 1a 灰色7.5Y5/1 細砂混じり極細砂
2a 灰色10Y6/1 極細砂
3 黄灰色2.5Y5/1 シルト混じり極細砂
3a 褐灰色10YR5/1 極細砂混じりシルト
3b 黄灰色2.5Y5/1 極細砂混じりシルト
4a 灰色2.5Y4/1 粘質シルト (有機質混じり)
5 黒色10Y2/1 シルト質極細砂 (土器小片あり)
6 暗灰色N3/- シルト
7 灰色 細砂混じり極細砂 (木片あり)
8 灰色7.5Y4/1 細砂混じりシルト
9 明オリーブ灰色5GY7/1 粘土
10 緑灰色7.5GY6/1 シルト
11 緑灰色10GY5/1 シルト質粘土
12 青灰色5BG5/1 粘土

0 1m

SD4903



- 1 灰色10Y4/1 極細砂混じり細砂
2 黄灰色2.5Y5/1 シルト混じり極細砂
3 灰色5Y5/1 極細砂混じりシルト
4 黄灰色2.5Y5/1 極細砂混じりシルト
5 褐灰色10YR4/1 極細砂混じりシルト
6 暗黄灰色2.5Y5/2 極細砂混じりシルト
7 褐灰色10YR4/1 極細砂混じりシルト
8 灰オリーブ5Y6/2 極細砂混じりシルト

0 1m

図17 第49次調査関連遺構断面図

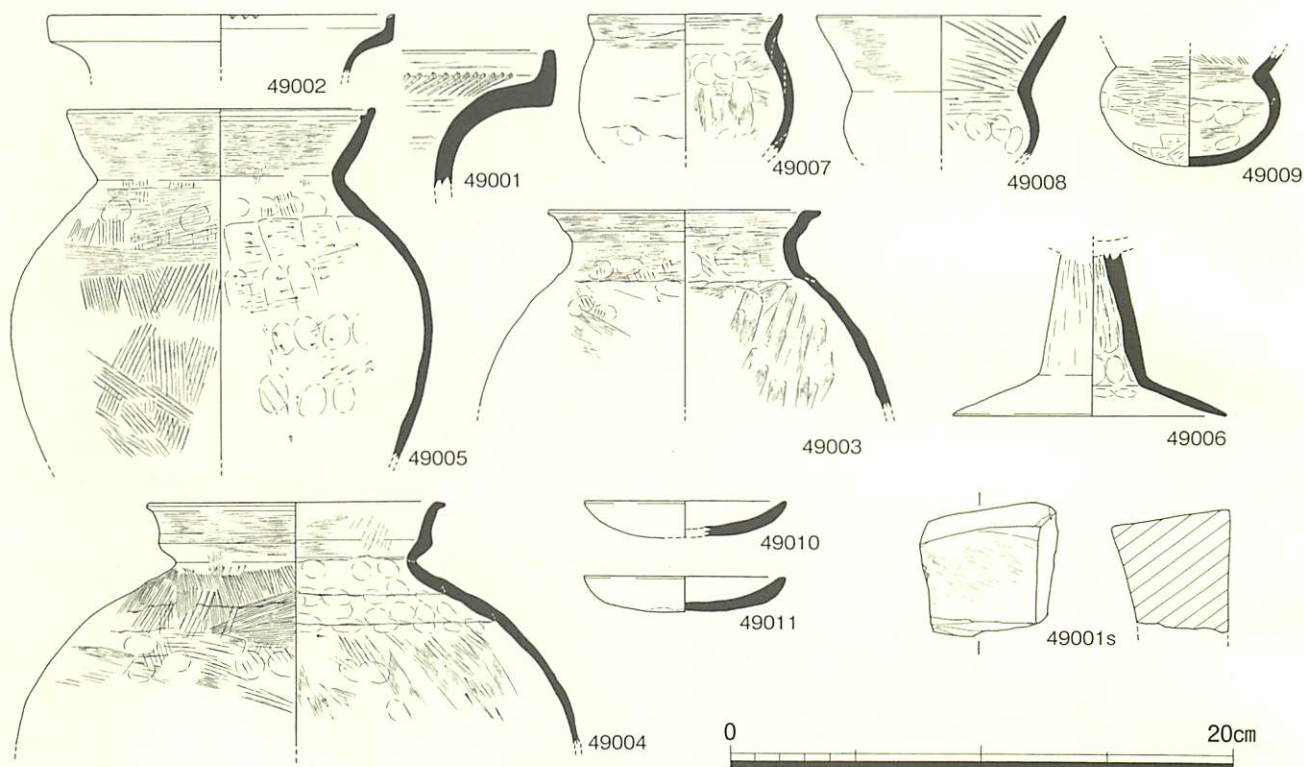


図18 第49次調査出土遺物実測図

表6 出土土器観察表 (第49次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調/胎土/焼成	備考
49001 図18 図版十六	甕	TA (I)	SD4901	中層	口 径：不明 残存高：5.5cm	外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	第1口縁内面に列点文を施す。	色調：(内) 7.5YR8/3 (外) 7.5YR7/4 胎土：1.5mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/8
49002 図18 図版十六	甕	TA (I)	SD4901	中層	口 径：14.0cm 残存高：2.0cm	外反する第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。	口縁端部に部分的にキザミ。	色調：(内) 7.5YR5/1 (外) 5YR6/4 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部若干
49003 図18 図版十六	甕	TA (I)	SD4902	砂層、中層の下	口 径：11.0cm 残存高：7.8cm	外反する口縁部が途中でわずかに角度を変え立ち上がるため、複合口縁状を呈する。端部は外側につまみ出し、水平な面をなす。	体部外面はハケ、ナデ、指押さえ。内面ケズリ、ナデ。口縁部内外面とも横ナデ。	色調：(内) 5YR7/6 (外) 5YR7/4 スス付着 胎土：1.0mm大の石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/4～体部若干
49004 図18 図版十六	甕	TA (I)	SD4902	砂層の下	口 径：12.0cm 残存高：9.8cm	肩が張る体部。短く外反する口縁部が外面に肥厚し、途中で角度を変えて立ち上がり複合口縁状を呈する。端部は外側につまみ出す。	外面体部ケズリ。肩部ハケ。内面頸部から体上位にかけて指オサエの痕跡を残す(接合痕)。口縁部内外面ともナデ。	色調：(内) 10YR8/2 (外) 10YR6/3 スス付着 胎土：まれに大粒の石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/7～体部
49005 図18 図版十六	甕	TA (I)	SD4902	砂層の下	口 径：12.4cm 残存高：14.0cm	体部最大径は中位より上。やや内湾する「く」字状口縁。端部は内側に肥厚し内傾する凹面。	外面体部斜めハケ。肩部はさらに横ハケ。内面体部はケズリ、ナデ。口縁部内外面とも横ナデ。	色調：(内) 2.5YR7/3 (外) 7.5YR8/2 スス付着 胎土：まれに大粒の石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/4～体部
49006 図18 図版十六	高坏	TA (I)	SD4902	砂層の下	脚底径：11.0cm 残存高：6.5cm	円錐状の脚柱部から屈折して裾部が大きく開く。	外面ミガキ。内面指オサエ、絞り痕。(柱状挿入)	色調：7.5YR7/3 胎土：精良 焼成：良好	脚部2/3
49007 図18 図版十六	小型丸底鉢	TA (I)	SD4902	砂層の下	口 径：7.8cm 残存高：5.6cm	口縁部は短く外上方に開き、端部は内湾気味におさめる。	外面体部指ナデ、指オサエ。口縁部横ナデ。内面口縁部横ハケ、指ナデ。	色調：5YR7/6 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/2～体部
49008 図18 図版十六	小型丸底鉢	TA (I)	SD4902	中層	口 径：10.0cm 残存高：5.6cm	口縁部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。	外面口縁部横ナデ。内面口縁部ハケ。体部ハケ、指ナデ、指オサエ。	色調：10YR8/2 胎土：1mm大の石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/2～体部
49009 図18 図版十六	小型丸底鉢	TA (I)	SD4902	砂層の下	口 径：不明 残存高：4.5cm	体部からやや内湾ぎみに屈曲する口縁を立ち上げる。	外面体部ケズリ、ミガキ。口縁部ミガキ。内面体部ナデ。口縁部ハケ、ミガキ。	色調：5YR7/6 胎土：精良 焼成：良好	頸部～体部完存
49010 図18 図版十六	土師器小皿	TA (I)	SD4903	上層	口径：8.2cm 器高：1.4cm	底部から口縁部にかけて内湾気味に開き、端部は尖り気味におさめる。		色調：(内) 10YR8/2 (外) 10YR8/1 胎土：精良 焼成：良好	皿1/3
49011 図18 図版十六	土師器小皿	TA (I)	SD4903	上層	口径：8.2cm 器高：1.4cm	底部から口縁部にかけて内湾気味に開き、端部は尖り気味におさめる。		色調：(内) 7.5YR8/3 (外) 7.5YR8/2 胎土：精良 焼成：良好	皿1/4

表7 出土石製品観察表 (第49次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
49001s 図18 図版十六	砥石	TA (I)	SD4902	砂層	砂岩	49	51	47.5	185.2	

5. 第50次調査の成果

(1) 調査地 守山市下之郷町字幸徳庵
289、290番地

(2) 調査期間 平成14年3月26日

(3) 調査面積 約20㎡ (959.97㎡)

(4) 担当者 川畑和弘

(5) 調査経緯と方法

守山市下之郷町字幸徳庵289、290番地の民間宅地（959.97㎡）において家屋の改築工事が行われることとなったため、事前に試掘調査を実施することとした。調査の結果、地下約1.2mの位置で旧地表面が検出され、土坑やピット、溝などが確認された。今回検出された遺構検出面の高さと家屋基礎の掘削深度を比較した結果、地下遺構の破損などは無いと判断されたため、検出遺構の記録を済ませた後は、埋め戻し旧状復旧をして調査を完了した。

(6) 検出遺構

調査を実施したのは、対象地の西端の建築予定部分を、バックフォーにて開掘（約30㎡）し遺構面を検出した。遺構密度は非常に高く、ピットや土坑、溝が切り合い、重複する状態で検出された。いずれの遺構も掘削を行っていないため、詳細な年代は不明であるが、充填する埋積土はいずれも灰色砂質土で、中世以降のものと推定され、下之郷遺跡の北辺に位置する隣接する播磨田城遺跡に関連する遺構と考えられる。

今回の調査では、弥生時代中期の環濠集落と関連する遺構は、検出されなかった。

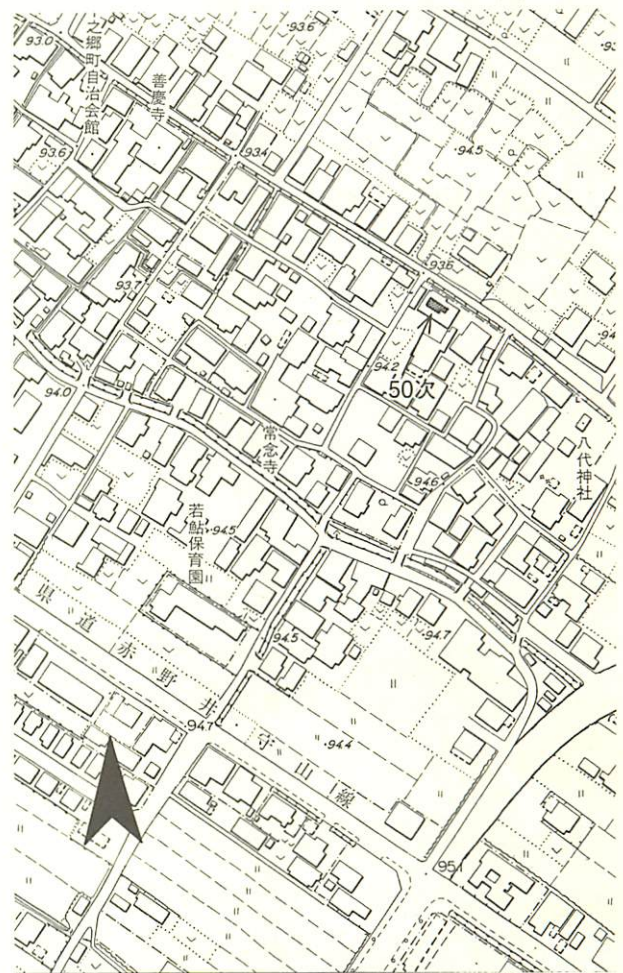


図19 第50次調査位置図

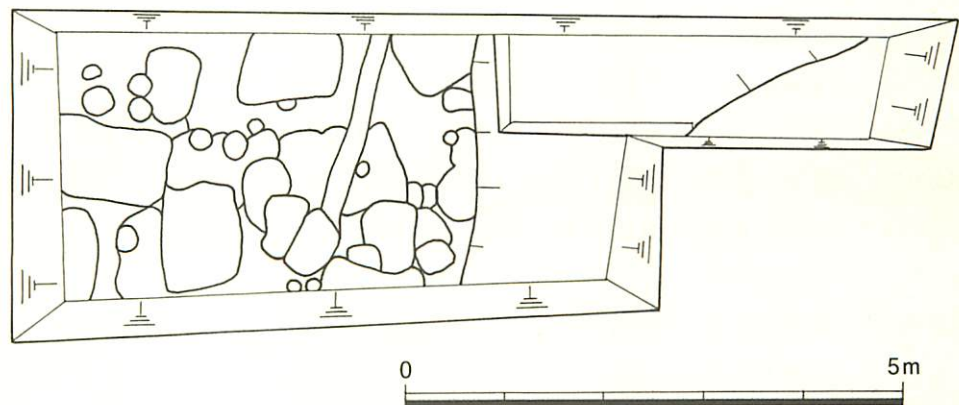


図20 第50次調査全体図

6. 第51次調査の成果

- (1) 調査地 守山市下之郷町
字皆広676-2、5番地
- (2) 調査期間 平成14年11月5日
～同年11月9日
- (3) 調査面積 174m²
- (4) 担当者 川畑和弘
- (5) 調査経緯と方法

第51次調査は、環濠集落の内部、南西側に位置する宅地部分にあたる。下之郷町在住の南出稔氏より個人住宅の改築の申請があがり、基礎工法について地下遺構の保護について協議した結果、一部土壌改良が行なわれる以外は、地下に遺構が保存されることとなった。建築工事に合わせて確認調査と立会調査の実施に協力を頂いた。

現地調査では、地下遺構の平面的な分布状況を把握することを目的に、重機にて表土（造成土と旧耕作土）を除去した後、人力と重機を併用して遺構面を検出した。今回の調査では、遺構の把握を主眼としたため、断ち割りや掘削調査は一部に止め、記録をとった後は、埋め戻し現状復旧して調査を終えた。

(6) 検出遺構

地表から約30cm地下で黄灰色シルト質土の遺構検出面が確認され、土坑、溝状遺構、井戸跡、柱穴などが密集して検出された。

- SD5101 幅約40cm、深さ約20cm、断面U字形を呈する溝で、北北東から南南西に直線で伸びている。
- SD5102 幅約80cm、深さ約30cm、断面U字形を呈する溝状の遺構である。
- SD5103 幅約60cm、深さ約20cmを測る溝で、西北西から南南東へ直線で伸びている。
- SD5104 幅約50cm、深さ約15cmを測る溝で、西北から南東へ伸びている。
- SK5101 調査区西隅に位置する長円形の土坑で、長径約120cm、短径約80cm測る。
- SX5101 調査区東側で検出された円形の遺構で、直径約120cm測る。掘削していないため詳細は不明。
- SX5102 調査区東側で検出された円形の遺構で、直径約120cm測る。掘削していないため詳細は不明であるが、ボーリングステッキを使用して地下の様子を観察した結果、1m以上掘られていることが判明し、また堆積している土壌状況から井戸跡の可能性が高いことが

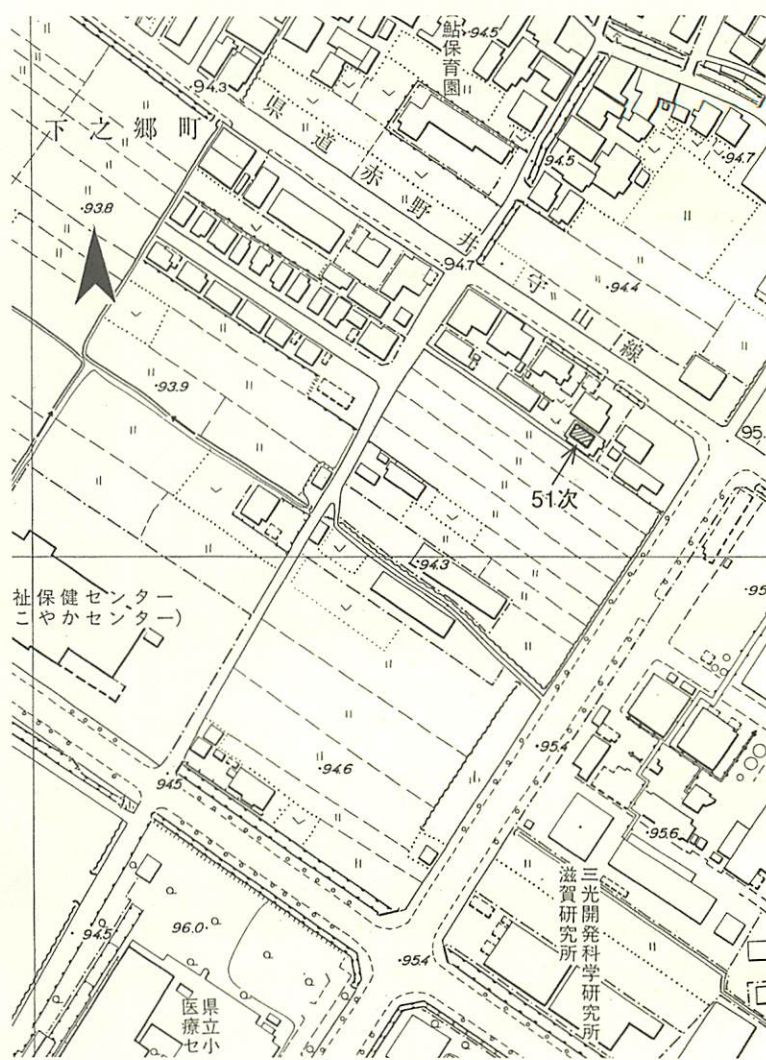


図21 第51次調査位置図

判断された。

SX5103 (SX5104) SX5102に近接して掘られた円形の遺構で、直径約120cm測る。未掘削であるため詳細は不明である。

SX5105 調査区中央西側で検出された隅丸方形の土坑状遺構で、直径約140cmを測る。

SX5106 調査区西側で検出された隅丸長方形の土坑。長辺約110cm、短辺約50cmを測る。

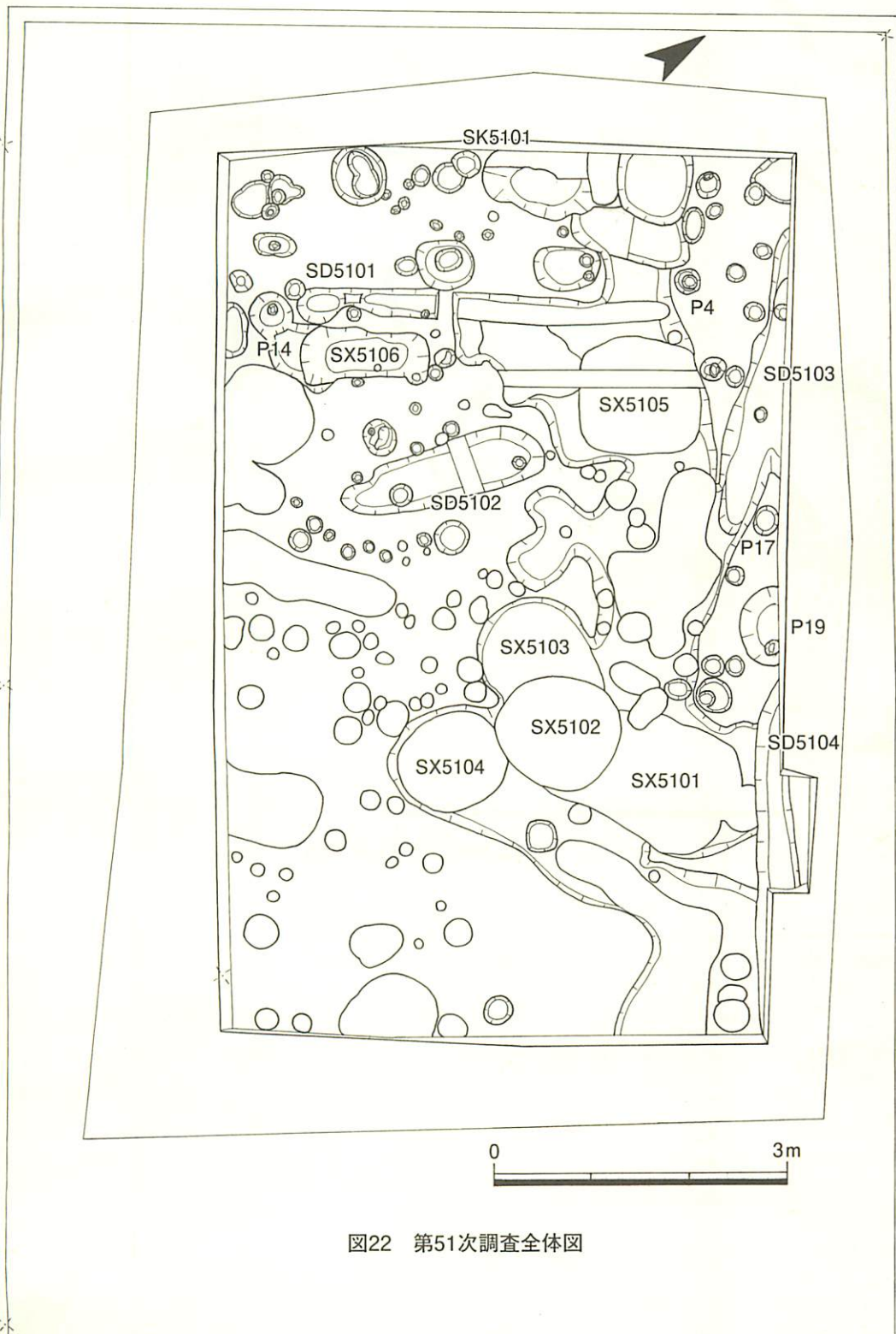


図22 第51次調査全体図

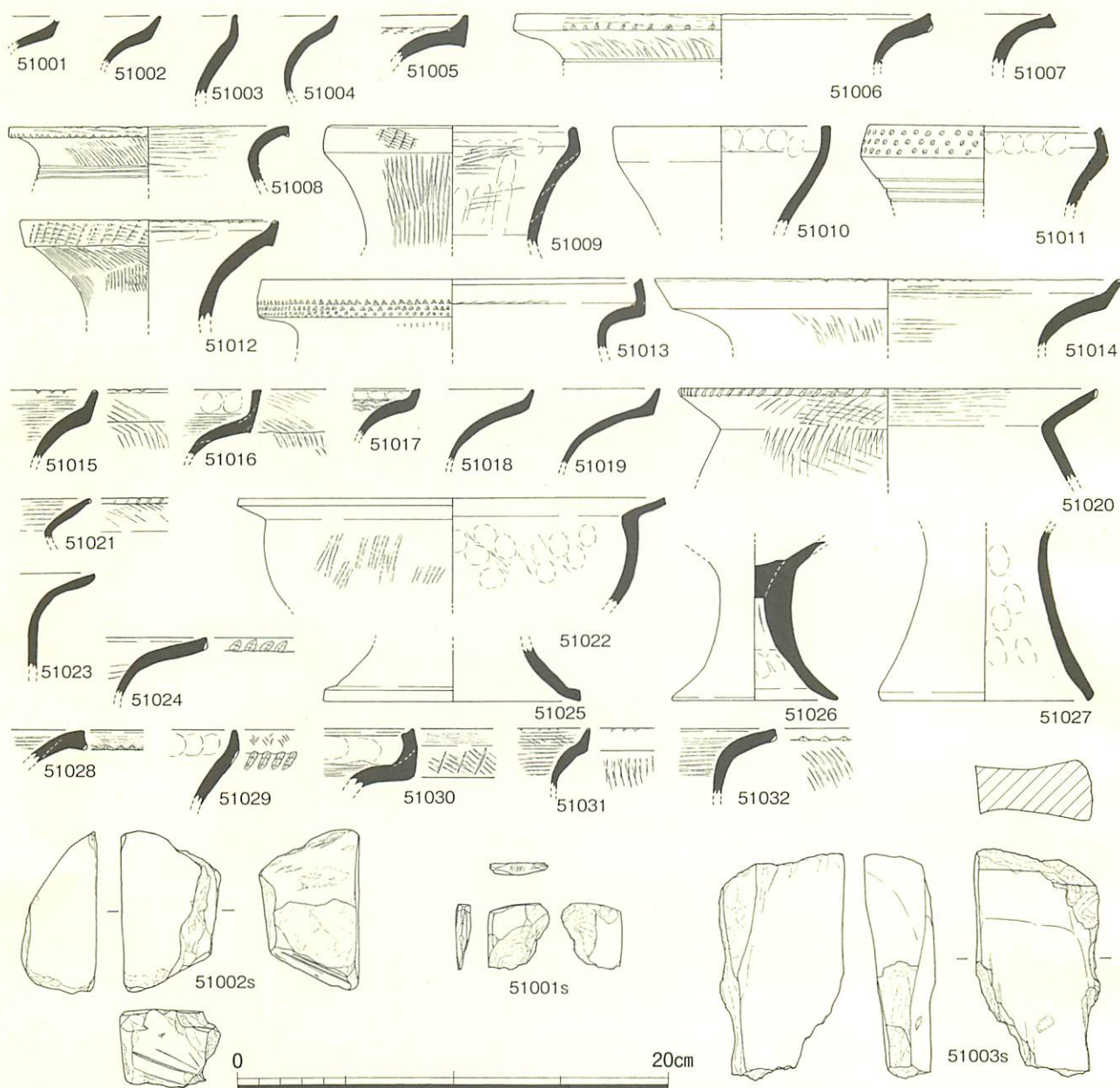


図23 第51次調査出土遺物実測図

表8 出土土器観察表 (第51次調査)

実測番号 挿図 写真図版	器種	調査区	遺構	層位	法量	形態的特徴	手法的特徴	色調/胎土/焼成	備考
51001 図23 図版十七	壺	TA (I)	SD5103		口 径：不明 残存高：1.5cm	外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	内面横ハケ。	色調：摩滅10YR7/1 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部若干
51002 図23 図版十七	甕	TA (I)	SD5103		口 径：不明 残存高：2.1cm	外反する第1口縁から大きく外傾する第2口縁を立ち上げる。	内面横ハケ。	色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 7.5YR7/2 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/8
51003 図23 図版十七	壺	TA (I)	SD5104		口 径：不明 残存高：3.7cm	外上方に伸びる口縁が角度を変えて立ち上がる。	外面第1口縁縦、斜めハケ。第2口縁横ナデか内面ナデか	色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 10YR8/2 胎土：1.5mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/6～ 体部若干
51004 図23 図版十七	甕	TA (I)	SD5104		口 径：不明 残存高：3.5cm	外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	第1口縁外面斜めハケ、内面横ハケ。	色調：(内) 7.5YR6/1 (外) 7.5YR6/3 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/6～ 頸部
51005 図23 図版十七	甕	TA (I)	SD5104		口 径：不明 残存高：2.1cm	緩やかに外反する第1口縁からは垂直に第2口縁を立ち上げる。	第1口縁内面に列点文。	色調：(内) 7.5YR8/3 (外) 摩滅10YR6/ 1胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/6～ 頸部
51006 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ～ 5104	上面	口 径：19.0cm 残存高：2.3cm	短く外反して端部はやや肥厚し面をなす。	外面斜めハケを重ねた後、頸部に拂描直線文。内面ナデ。端面上、下端にキザミ。	色調：5YR5/2 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/6～ 体部若干

51007 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：2.3cm	短く外反して端部は内外に肥厚し、内傾する面をなす。		色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 7.5YR8/1 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 体部若干
51008 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：13.0cm 残存高：2.6cm	短く外反する口縁は端部でやや肥厚し外側に面を作る。	外面は斜めハケ後、頸部に櫛描直線文。端面上、下端にキザミ。内面横ハケ。	色調：(内) 5YR5/3 (外) 5YR3/2 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部若干
51009 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：11.6cm 残存高：5.5cm	外反気味に外上方に伸びる口縁が上端で屈折して内傾気味に立ち上がる。	外面口頸部は縦ハケ。第2口縁部は斜ハケの後に櫛状工具による列点文を廻らす。内面はナデか。	色調：(内) 10YR6/1 (外) 10YR8/1 胎土：1mm大までの石粒多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51010 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：10.0cm 残存高：4.5cm	外傾して伸びる口縁が上端で垂直に立ち上がる。端部は水平面。		色調：7.5YR8/2 胎土：1.5mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51011 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：10.6cm 残存高：3.7cm	緩やかに外反する口縁が上端でやや内傾し立ち上がる。	第1口縁外面に櫛描直線文（残存3条）。第2口縁外面に列点文。	色調：(内) 10YR10/1 (外) 10YR8/2 胎土：1mm大までの石粒多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 体部若干
51012 図23 図版十八	壺	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：12.0cm 残存高：4.6cm	大きく外反する口縁が上端で内傾気味に立ち上がる。	外面に斜位ハケを重ね、第2口縁には櫛状工具で列点文。端部にキザミ。口縁内面はナデか。	色調：10YR8/1 胎土：まれに大粒の石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/8
51013 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：17.5cm 残存高：3.2cm	短く外反した第1口縁から内傾気味に第2口縁を立ち上げる。端部は内傾する面。	第1口縁外面は縦ハケ。第2口縁外面に列点文。	色調：7.5YR8/2 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部 若 干 44007と同一固 体の可能性あり
51014 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：21.5cm 残存高：3.1cm	緩やかに外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁ハケ。内面横ハケ。端部にキザミ。	色調：(内) 10YR8/2 (外) 10YR7/2 胎土：1mm大までの石粒多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/3 ~ 頸部
51015 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：3.1cm	緩やかに外反する第1口縁から外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	口頸部外面は縦ハケ。内面は横ハケ。端部にキザミ。		
51016 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：3.0cm	外反する第1口縁からやや外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面斜めハケ。内面第1口縁横ハケ、第2口縁ナデ。	色調：(内) 10YR8/2 (外) 10YR7/2 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部若干
51017 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：2.2cm	外反する第1口縁から短く第2口縁を立ち上げる。	第1口縁内面に波状文。	色調：7.5YR7/3 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部 1/6 ~ 頸部
51018 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：3.4cm	緩やかに外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	第1口縁外面縦、斜ハケ。	色調：(内) 10YR6/3 (外) 10YR4/3 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/8
51019 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：不明 残存高：3.4cm	緩やかに外反する第1口縁から外傾する第2口縁を立ち上げる。	内外面とも摩滅のため調整不明。	色調：(内) 5YR6/1 (外) 2.5YR7/4 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/3 ~ 頸部
51020 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：19.0cm 残存高：4.1cm	「く」の字状口縁	外面体部ハケ、タタキ。口縁部ハケ。内面口縁部横ハケ。口縁端部にキザミ。	色調：(内) 5YR8/3 (外) 5YR7/4 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部1/8
51021 図23 図版十七	甕	TA (I)	SX5101 ~ 5104		口 径：不明 残存高：1.8cm	「く」の字状口縁	外面に斜ハケ。端部にキザミ。	色調：(内) 5YR8/3 (外) 5YR6/4 胎土：1mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口縁部若干
51022 図23 図版十七	鉢	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	口 径：19.6cm 残存高：4.8cm	内湾する体部から「く」の字状に鋭く屈曲する口縁。	内外面とも摩滅の為不明瞭であるが内面に指頭圧痕、外面はタタキ痕？	色調：7.5YR7/4 胎土：1.5mm大までの石粒を含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51023 図23 図版十八	鉢	TA (I)	SX5101 ~ 5104		口 径：不明 残存高：4.4cm	屈曲気味に外反し端部は丸くおさめる。	口頸部外面は縦ハケ。内面は横ハケか。	色調：5YR8/3 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51024 図23 図版十八	甕	TA (I)	SX5106		口 径：不明 残存高：2.7cm	外反し端部は外側に面をなす。	端部にキザミ。	色調：7.5YR8/1 胎土：1.0mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51025 図23 図版十八	高坏	TA (I)	SX	上面	脚底径：12.0cm 残存高：2.6cm	「ハ」の字状に開く脚裾部で短く屈曲し端部は外側に面をなす。	内外面とも摩滅の為不明瞭。	色調：(内) 7.5YR8/1 (外) 摩滅7.5Y58/1 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 体部若干
51026 図23 図版十八	高坏	TA (I)	SX	上面	脚底径：7.6cm 残存高：7.2cm	「ハ」の字状に開き端部は尖り気味。	円盤充填法。	色調：(内) 10YR8/1 (外) 7.5YR8/2 胎土：微石粒を含む 焼成：良好	口 縁 部1/3 ~ 頸部
51027 図23 図版十八	器台	TA (I)	SX	上面	脚底径：9.5cm 残存高：7.7cm	円錐条の脚部。	内外面とも摩滅の為不明瞭。	色調：7.5YR7/6 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部1/8
51028 図23 図版十七	甕、 壺？	TA (I)	SK5101		口 径：不明 残存高：1.5cm	短く外反し端部は外側に肥厚して内傾する面をなす。	外面縦ハケ。内面横ハケ。端部下端にキザミ。	色調：摩滅10YR3/1 胎土：微石粒を多く含む 焼成：良好	底部1/2弱
51029 図23 図版十七	壺	TA (I)	P-4		口 径：不明 残存高：3.4cm	外上方に伸びる口縁が上端で立ち上がる。	内面に指オサエ。第1口縁外面に列点文。第2口縁波状文か。	色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 7.5YR8/3 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部若干
51030 図23 図版十七	甕、 壺？	TA (I)	P-14		口 径：不明 残存高：2.7cm	第1口縁からはほぼ垂直に第2口縁を立ち上げる。第2口縁上半部は強いナデによりやや内傾気味。端部は内傾する凹面をなす。	内面第1口縁は横ハケ、第2口縁は指オサエ、ナデ。	色調：(内) 7.5YR8/2 (外) 7.5YR7/3 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口縁部若干
51031 図23 図版十七	甕、 壺？	TA (I)	P-17		口 径：不明 残存高：2.8cm	外反する第1口縁からやや外傾気味に第2口縁を立ち上げる。	外面第1口縁縦、斜ハケ。内面横ハケ。	色調：2.5YR7/4 胎土：1mm大までの石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部1/6 ~ 頸部
51032 図23 図版十七	甕、 壺、 鉢？	TA (I)	P-19		口 径：不明 残存高：2.9cm	短く外反し端部は面をなす。	外面斜めハケ。内面横ハケ。端部下端にキザミ。	色調：摩滅10YR3/1 胎土：1.5mm大の石粒を多く含む 焼成：良好	口 縁 部 若 干 44007と同一固 体の可能性あり

表9 出土石製品観察表（第51次調査）

実測番号 挿図 写真図版	器 種	調査区	遺 構	層 位	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
51001s 図23 図版十八	扁平片刃石斧	TA (I)	SK5101			30	28.5	6.8	7.85	
51002s 図23 図版十八	砥石	TA (I)	SX5101 ~ 5104	上面	砂岩	73.5	46	35	139	
51003s 図23 図版十八	砥石	TA (I)	SX5101 ~ 5104		砂岩	98	54	28	189.4	

(7) 出土遺物

今回の調査では、一部を除き、地下に遺構が保存されることとなったため、全域におよぶ本発掘調査は行っていないが、検出面や一部遺構の断ち割り、擁壁立会調査の際に若干の遺物が出土した。

土器（51001～51032）

土器については、今回の調査地からコンテナ（26ℓ）で1箱分が出土し、そのうち図示可能な弥生土器32点を掲示することができた。（51001・51002）はSD5103から出土したものでⅣ様式の中でも古い要素を持つものである。51003～51005の3点はSD5104から出土したものの。51024がSX5106から出土したものの。51024を除く51006～51027の20点がSX5101～51005を包括して広がっていた表層面（上層）から出土したもの（一部掘り下げたのみ）である。この20点の弥生土器には、Ⅳ様式のなかでも古い要素をもつもの（51014, 51015, 51016など）と新しい要素をもつもの（51011, 51013など）が混在しており、SX5101～51005の遺構がかなりの時間差をもって、別個に掘削・埋没していた可能性を示している。51028が土坑（SK5101）から出土したものの。51029～51032の4点が柱穴（pit）から出土したものである。以上、今回掲示できた土器は、全て弥生土器（畿内第Ⅳ様式並行期）に相当するものである。

石製品（51001s～51003s）

出土した石製品について、3点を図示した。51001sはSK5101から出土した扁平片刃石斧の破損品である。51002s, 51003sは、砥石で平滑面を残している。

(8) 小結

今回の調査地からは、土坑や溝、井戸、柱跡などが多数検出された。この場所は、これまで遺跡の中枢部ではないかと推定された調査地点（第40, 44, 55, 58次など）に近く、遺構の種類も豊富で密度も非常に高い傾向にある。出土した土器をみると時期的にはⅣ期前葉から後葉にかけての型式差が認められ、検出遺構が全て同一時期のものだけではなく、時間差をもって営まれた結果とみるべきだろう。これまで、遺跡の中央部の調査では、建物や区画溝が計画的に配置されていることが指摘され、さらに、その方位軸には2つの異なった軸があることも指摘されている（第58次）。今回の調査地からは、小溝が検出されているが、現時点（未掘削）では、これまでに指摘されている方位軸に符合するものはないようである。今後周辺を調査する際には、柱並びや配置された溝の方位などに注意し、方位軸を意識した建物配置などを検証していくことが必要である。

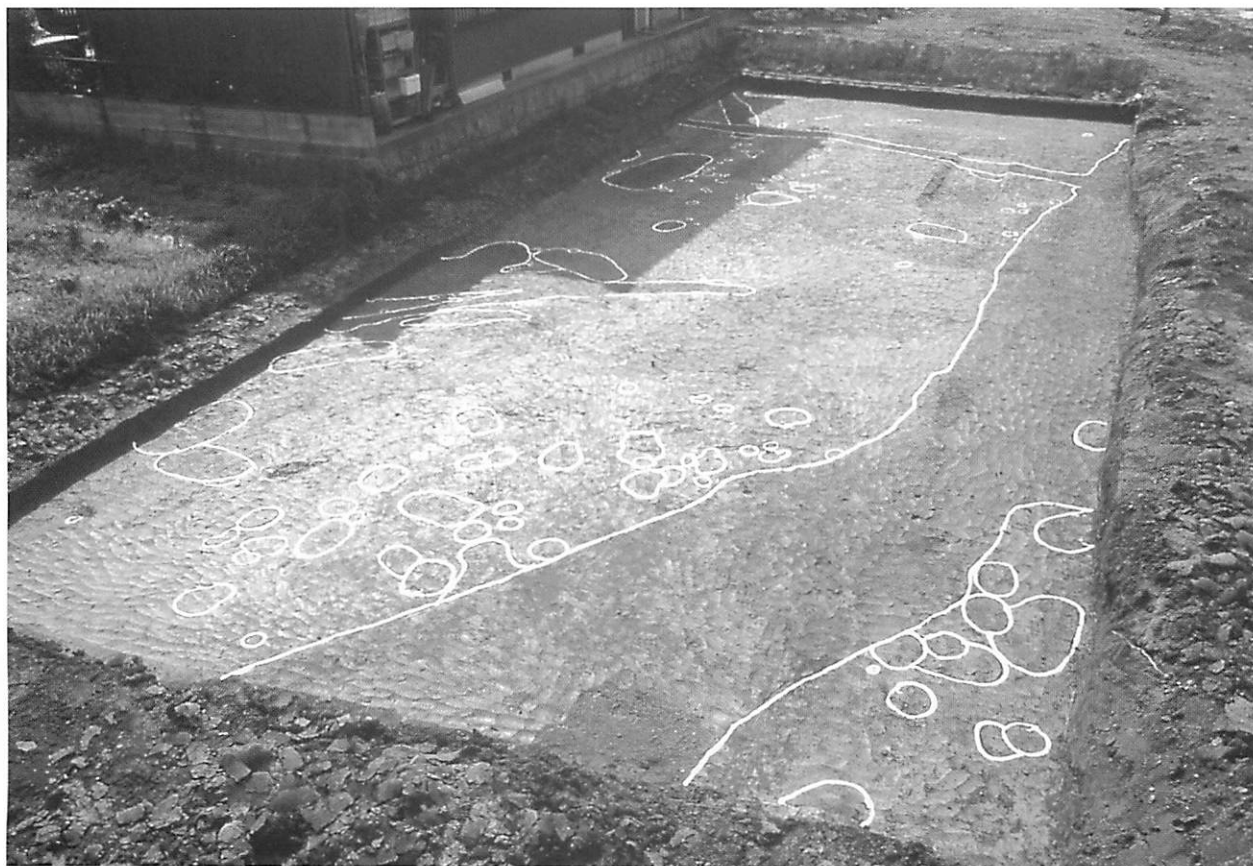


第46次調査 調査地全景（南東より）



第46次調査 調査地全景（北西より）

南東



第46次調査平面検出状況（TB地区）

TC 南東



第46次調査平面検出状況（TB地区）（東より）

TC 北西



環濠検出状態 (TB地区) T4



SDR4601 (北東より)



SDR4602 (北東より)



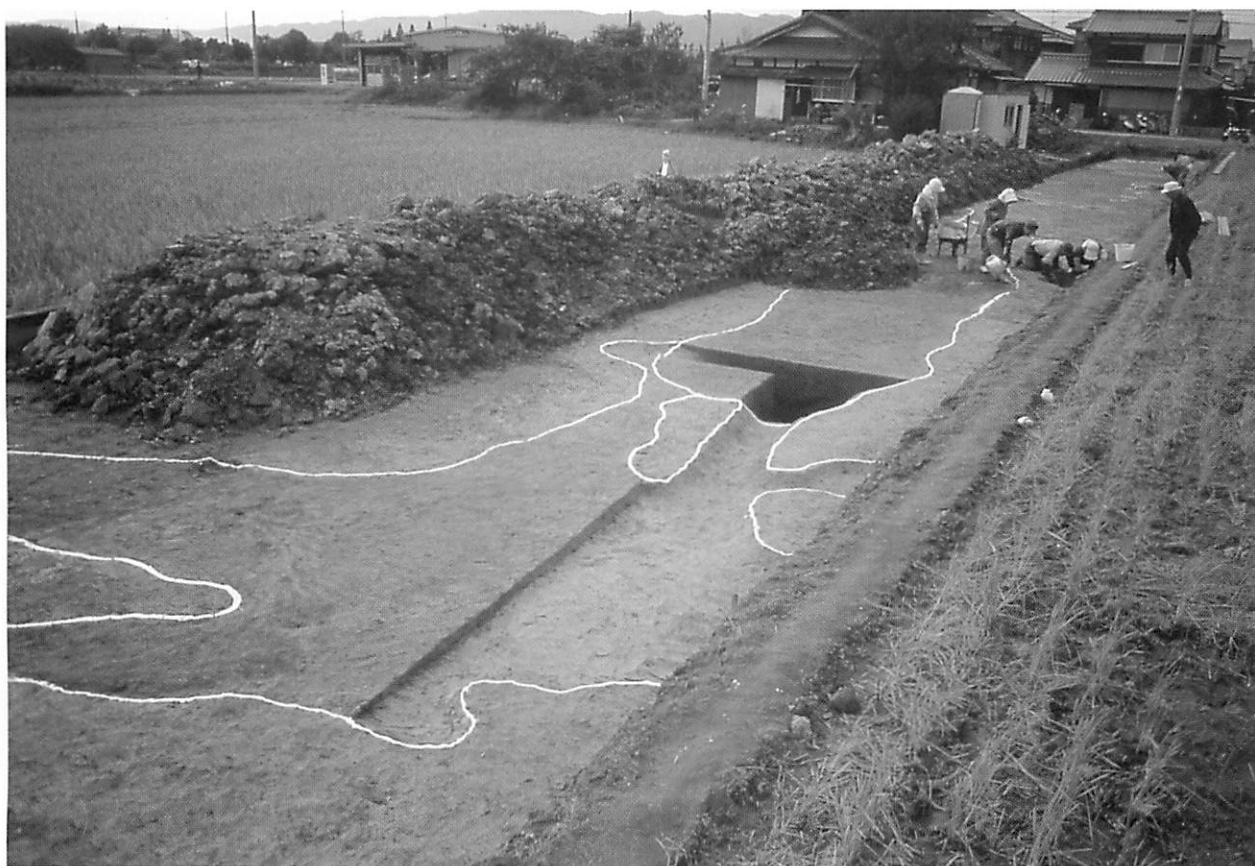
SDR4603 (西より)



第47次調査平面検出状況（北西より）



第47次調査平面検出状況（北西より）



第47次調査風景（東より）



SD4701（北より）



SD4701 調査風景（南東より）



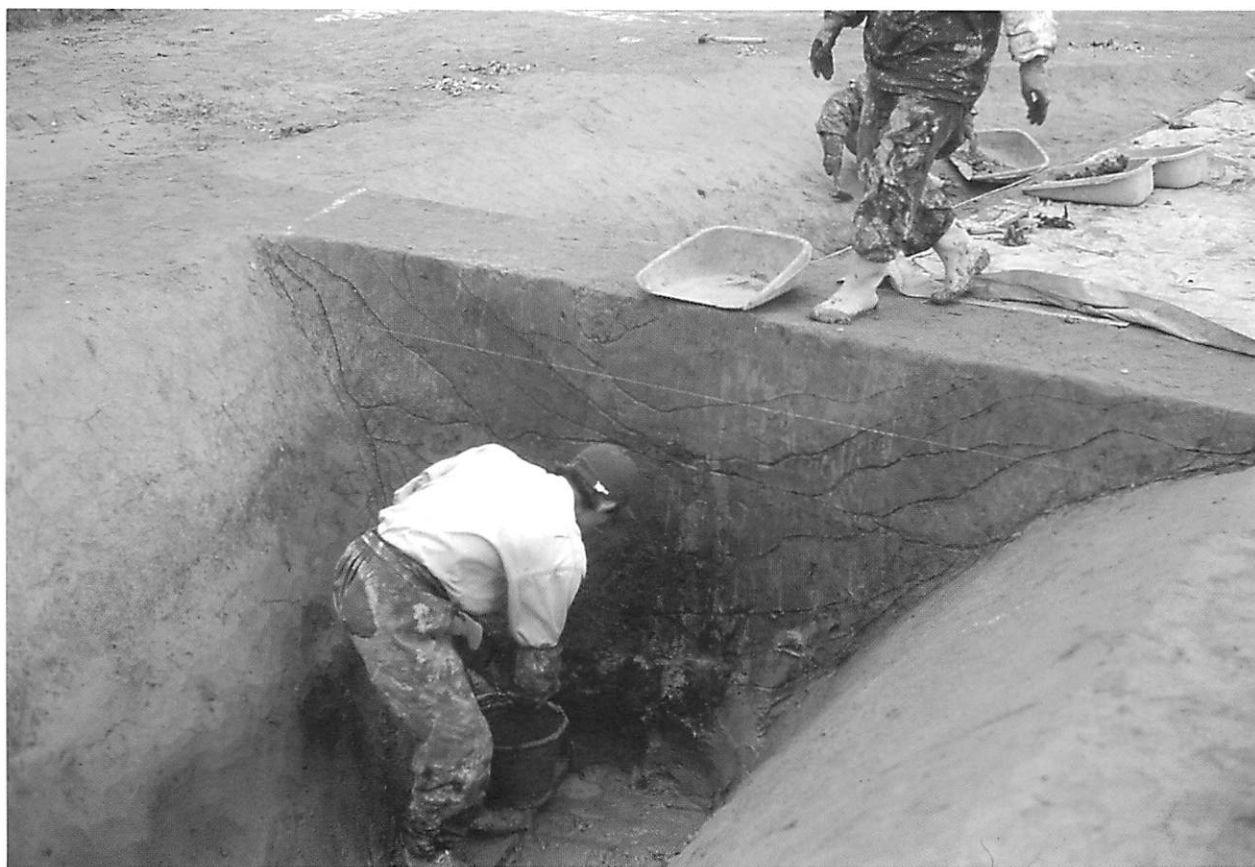
SD4701 断割状況



第48次調査 調査地全景（南東より）



第48次調査 調査地全景（北西より）



SD4803 調査風景（北西より）



SD4803 調査状況



第49次調査 調査地全景（南東より）



第49次調査 調査地全景（北西より）



SD4901 断割状況



SD4902 断割状況



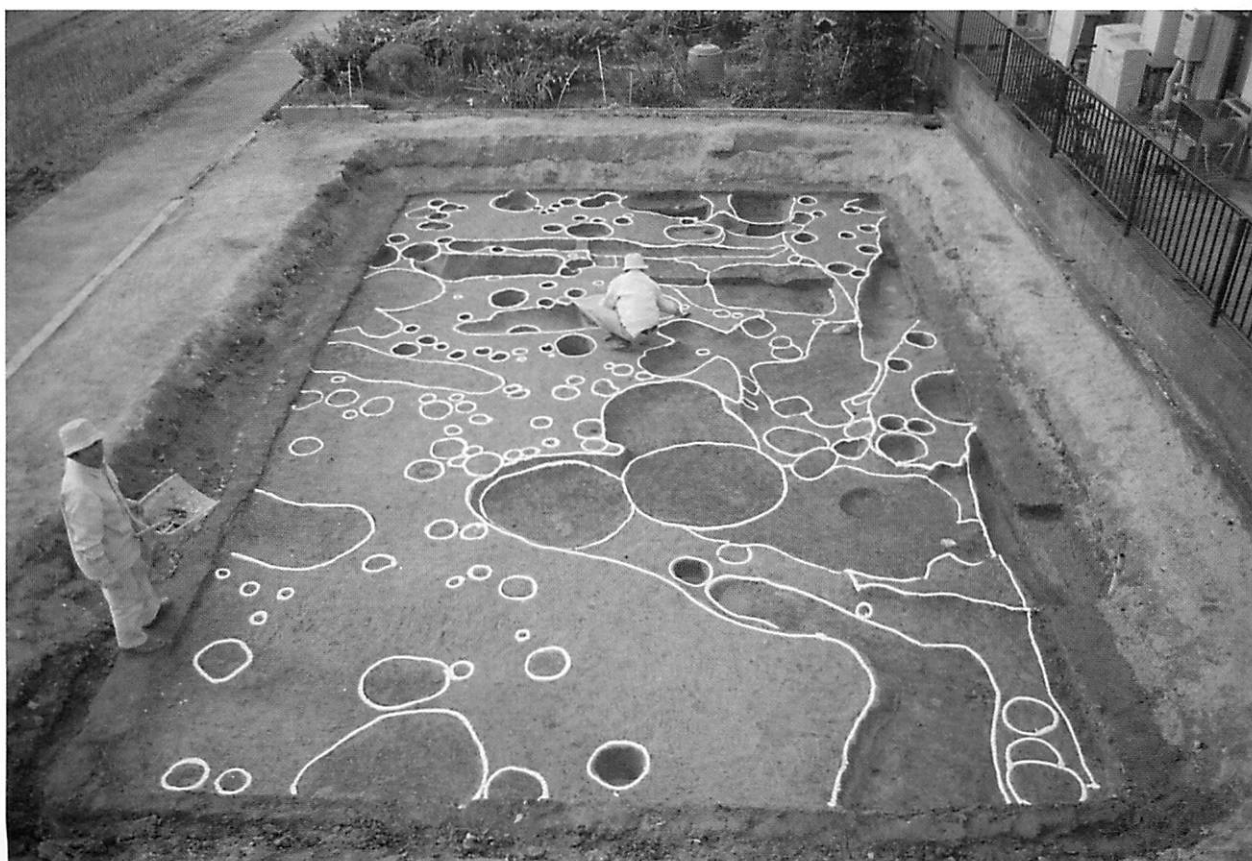
第50次調査遺構検出状況（南東より）



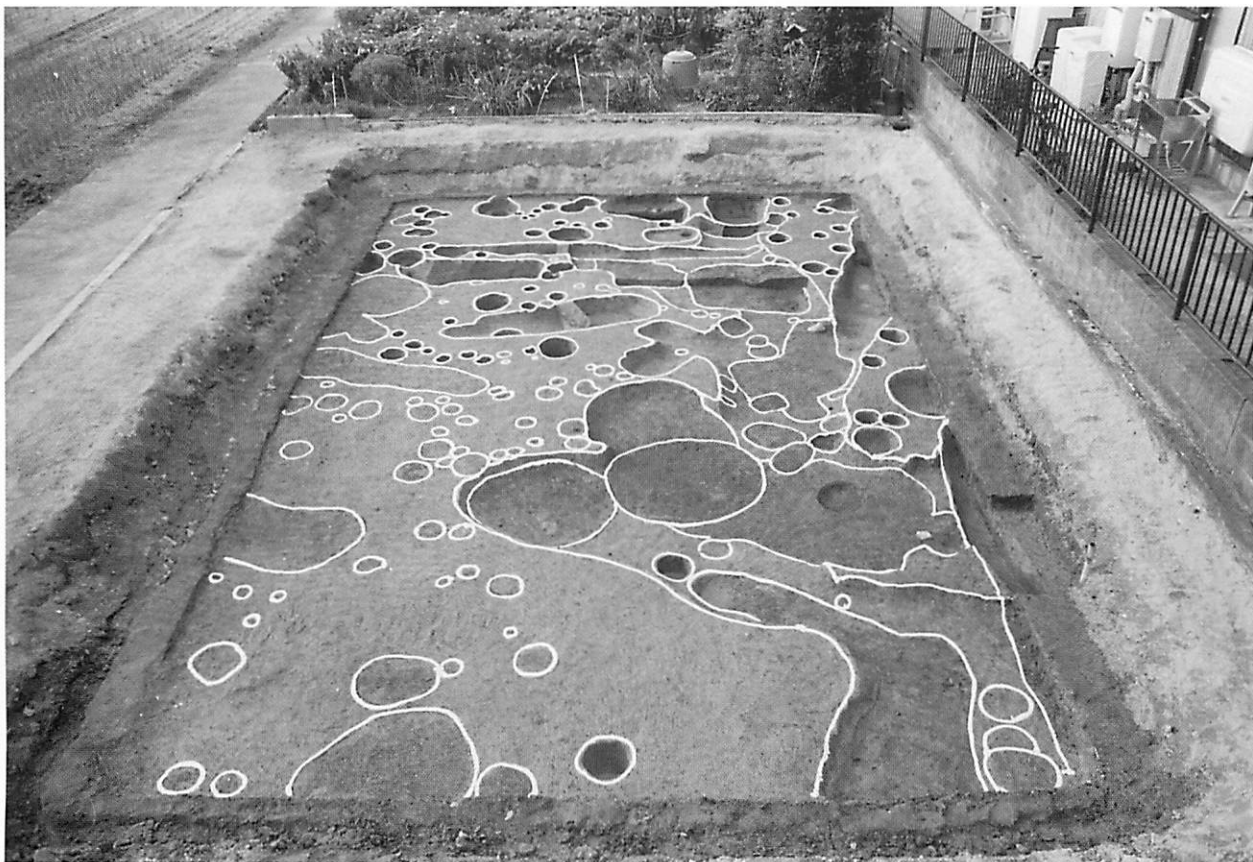
第50次調査平面検出状況（北西より）



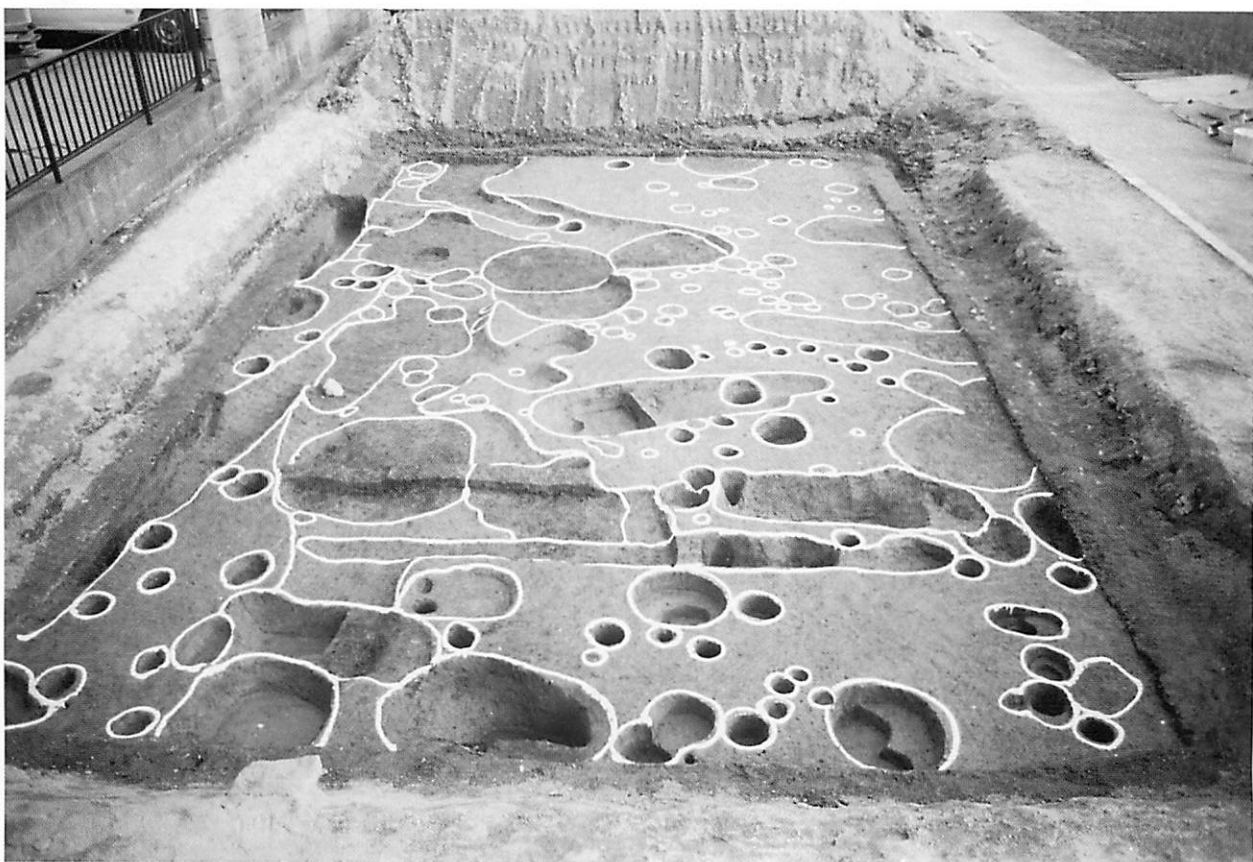
第51次調査 調査風景（西より）



第51次調査 調査風景（南東より）



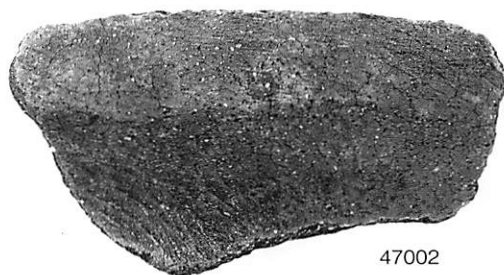
第51次調査遺構検出状況（南東より）



第51次調査遺構検出状況（北西より）



47001



47002



47003

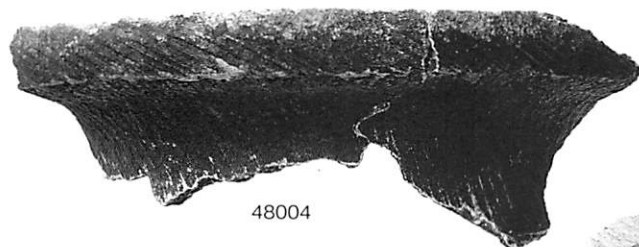


47004



47001s

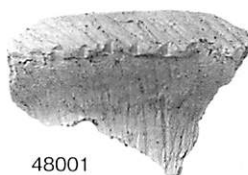
第47次調査出土遺物



48004



48003



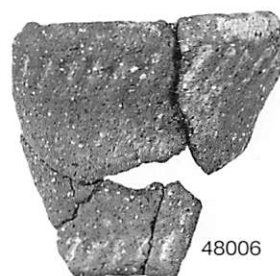
48001



48005



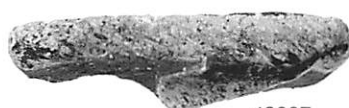
48002



48006

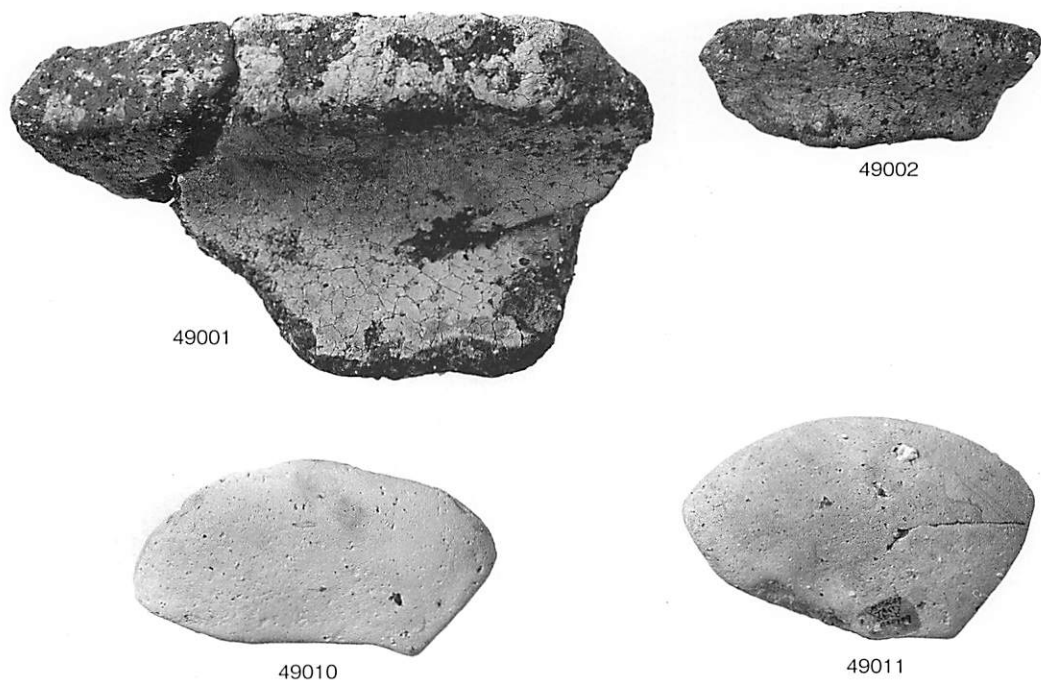


48001s

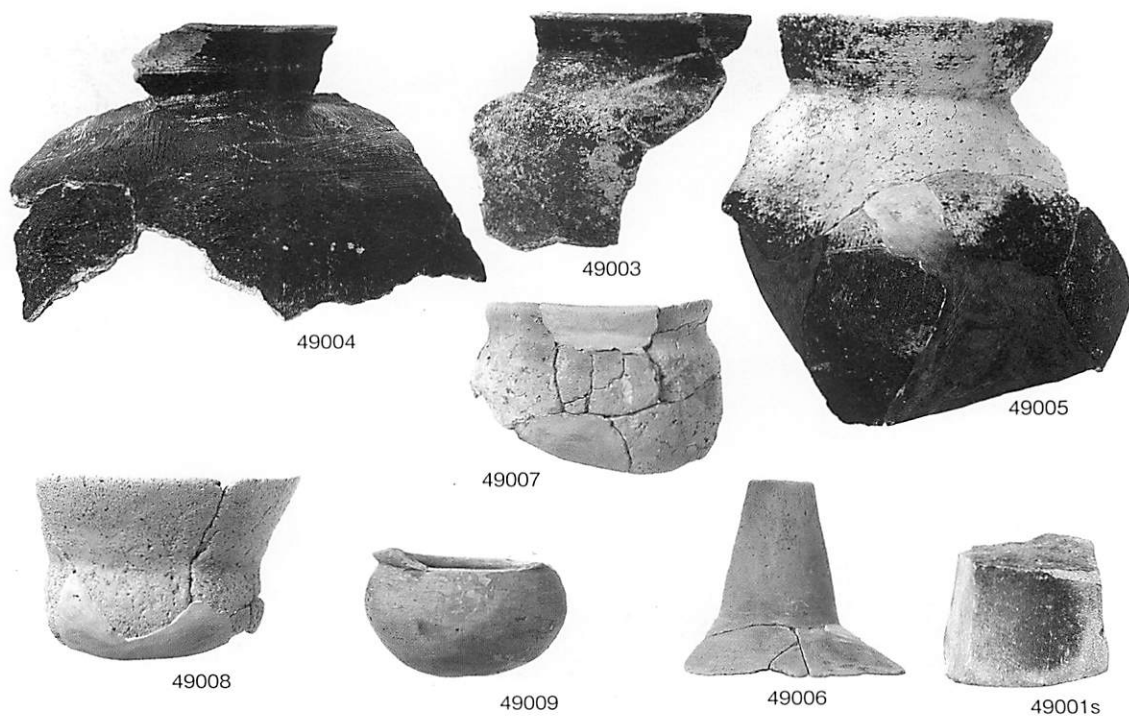


48007

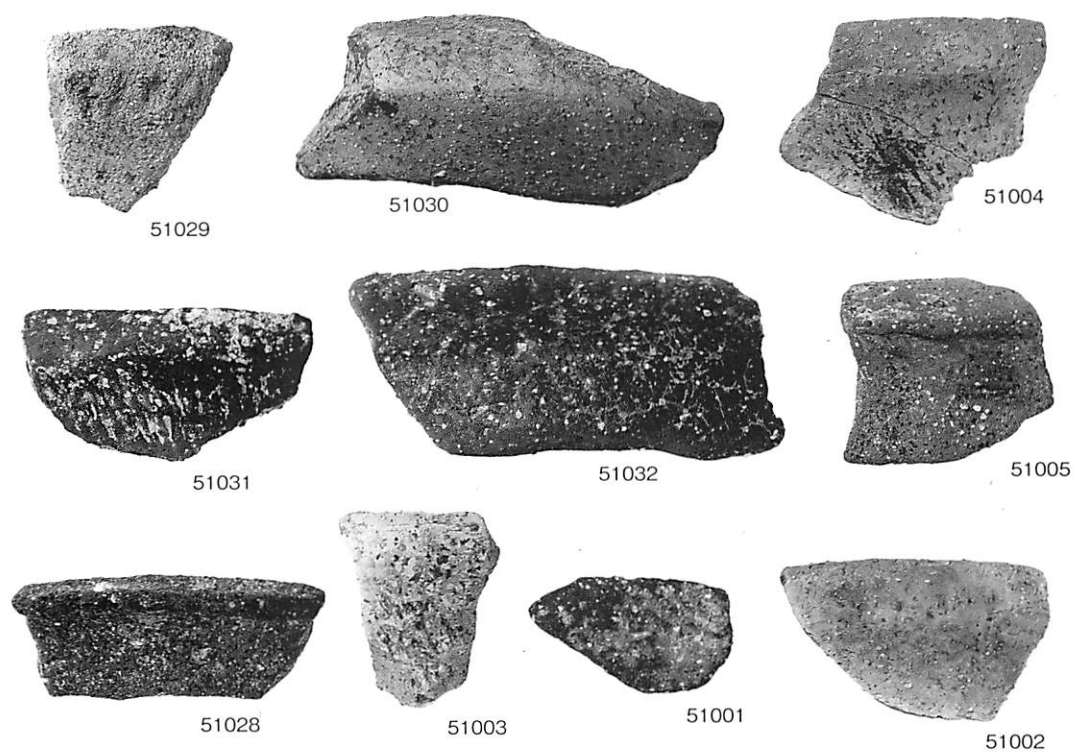
第48次調査出土遺物



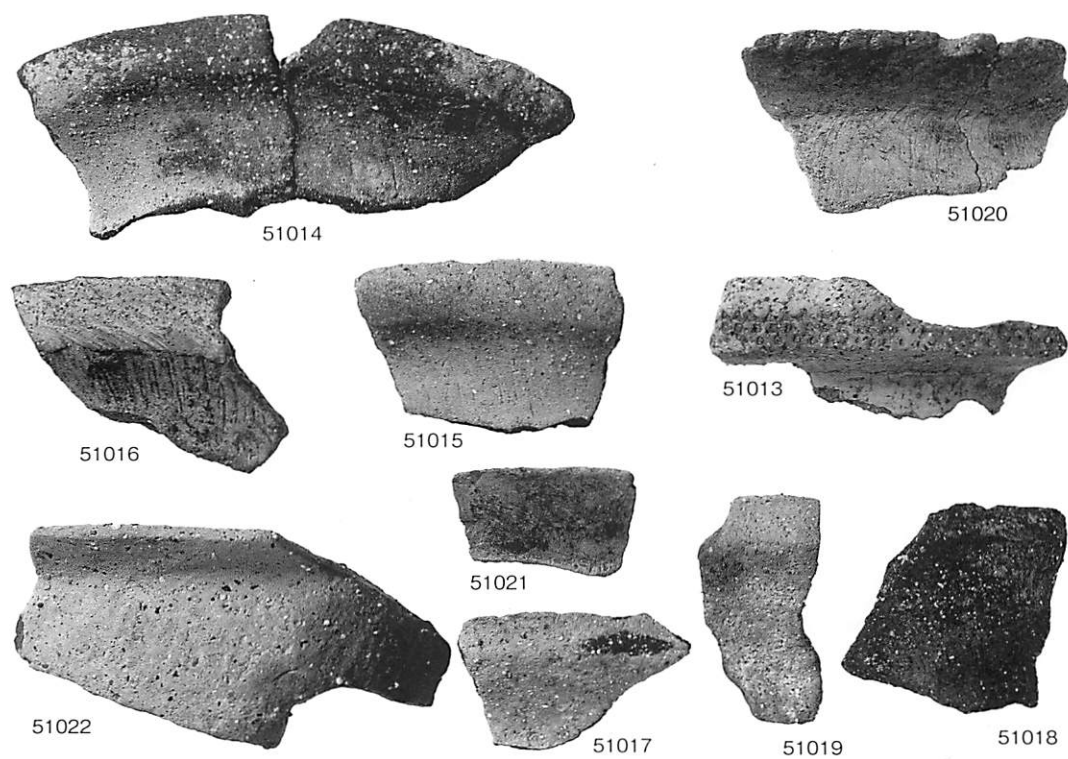
第49次調査出土土器



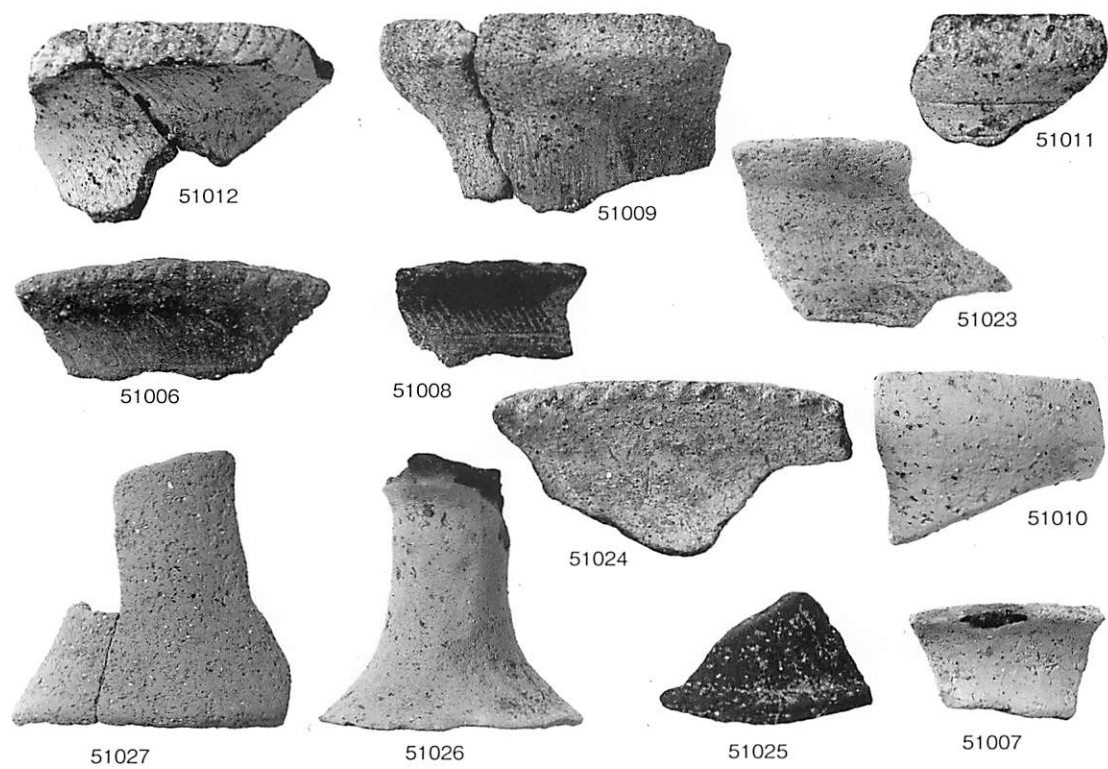
第49次調査出土遺物



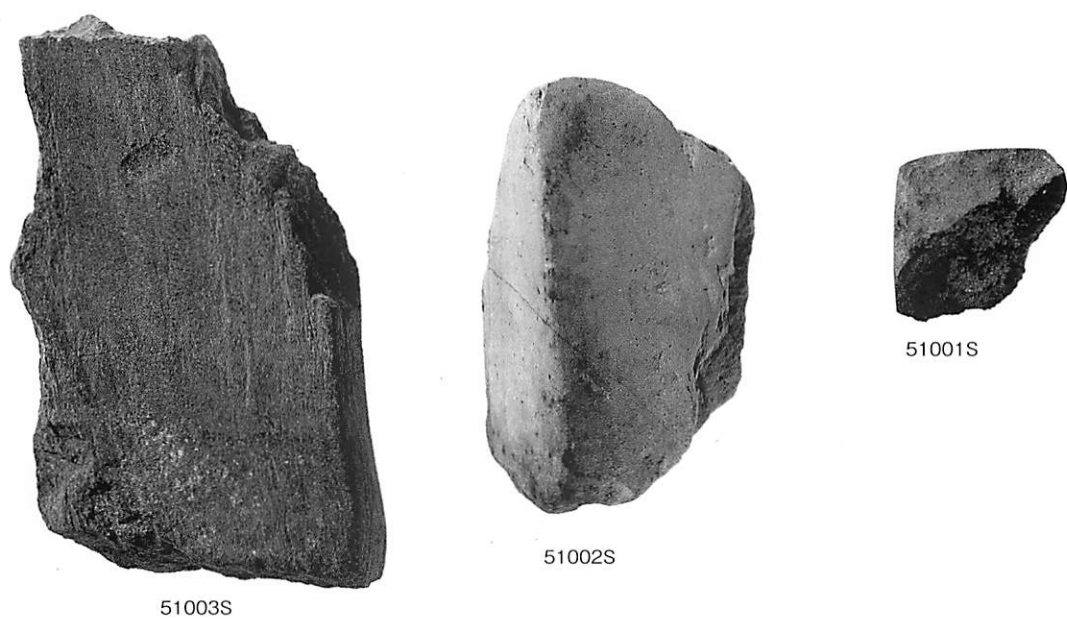
第51次調査出土土器



第51次調査出土土器



第51次調査出土土器



第51次調査出土石製品

報 告 書 抄 録

フリガナ	シモノゴウイセキカクニンチョウサハウコクショ V							
書 名	下之郷遺跡確認調査報告書 V							
副 書 名	第46・47・48・49・50・51次調査報告書							
巻 次								
シリーズ名								
編 著 者 名	川 畑 和 弘							
編 集 機 関	守山市教育委員会							
所 在 地	〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目5番22号 TEL077-582-1156							
発行年月日	平成21年3月							
フリガナ 所 収 遺 跡	フリガナ 所 在 地	コード 市町村	遺跡番号	北 緯 ° , ' , "	東 経 ° , ' , "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下之郷遺跡 (第46次)	滋賀県守山市下之郷町 字久戸504-1番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2001年5月23日 ～ 8月20日	約1,300	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第47次)	滋賀県守山市下之郷町 字上門田544-1番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2001年10月12日 ～ 12月7日	860	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第48次)	滋賀県守山市下之郷町 字上門田543-1番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2001年11月30日 ～ 12月28日	650	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第49次)	滋賀県守山市下之郷町 字久戸507-1、4番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2002年1月8日 ～ 1月28日	約80	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第50次)	滋賀県守山市下之郷町 字幸徳庵290番地	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2002年3月26日	約20	重要遺跡 範囲確認
下之郷遺跡 (第51次)	滋賀県守山市下之郷町 字皆広676-2、5	25207	50	35° 2' 52"	135° 52' 29"	2002年11月5日 ～ 11月9日	174	重要遺跡 範囲確認
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
下之郷遺跡 (第46次)	集 落	弥生時代中期	環濠、壁立式建物 井戸跡、溝	弥生土器、磨製石器、 打製石器		宅地造成工事/重要 遺跡確認調査		
下之郷遺跡 (第47次)	集 落	弥生時代中期	大溝、土坑	弥生土器、石器				
下之郷遺跡 (第48次)	集 落	弥生時代中期	大溝、柱穴	弥生土器、石器				
下之郷遺跡 (第49次)	集 落	弥生時代中期	大溝	弥生土器、石器				
下之郷遺跡 (第50次)	集 落	中 世	柱跡、土坑					
下之郷遺跡 (第51次)	集 落	弥生時代中期	柱跡、土坑 井戸跡	弥生土器、石器				

下之郷遺跡確認調査報告書 V

— 第 46・47・48・49・50・51 次調査報告書 —

発 行 日 平成 21 年 (2009) 3 月

編集・発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目 5 番 22 号

印 刷 株式会社 スマイ印刷工業